

---

## 第7部 補遺編

---

第1章 補足掲載する木器	
第1節 補足木器掲載資料	288
第2節 材質同定及び年代測定対象資料について	290
第2章 補足掲載する特殊土器	
第1節 絵画資料	303
第2節 特殊土器	305
第3章 特定遺物の出土状況について	
第1節 木器生産の傾向について	312
第2節 特殊遺物の出土状況について	316
第3節 まとめ	316
第4章 科学的年代測定の成果と広域編年	
第1節 年代測定結果と考古学的資料	319
第2節 広域編年について	325
結語	331

# 第 I 章 補足掲載する木器

## 第 1 節 補足木製品掲載資料

本節は、2014 年刊行報告Ⅱ木器編に掲載しなかった補足資料を提示するものである。

1 は、コナラ属クスノキ節製の樹皮付ミカン割材である。出土地は 26 地区埋積浅谷灰色埴土Ⅱ層床直出土で、時期は八日市地方 9 期、集落Ⅲ期に該当する。

図上で上面には鉄斧による裁断の加工痕跡がみられ、根元方向にあたる下面は鉄斧による斜めの伐採痕が確認でき、先端部は伐倒時の切り残し箇所(ツル)がみられる。表面の劣化が激しく、楔痕跡等の加工痕跡は確認できなかった。

2 は、マンサク科イヌノキ製の刺突具である。出土地は 11 地区環濠 06 下層出土で、時期は八日市地方 6-7 期、集落Ⅱ期に該当する。表面の劣化が激しく加工痕跡は不明瞭である。類似するものとして木針状があるが、木針状は主に針葉樹材利用であり、形状には円形ないしは多角柱ないしは円形を呈す A 類、断面形状が平らで且つ幅広になるものになるもの B 類(報告Ⅱ木器編第 X 章参照)と比べると、A 類、B 類どちらにしても、先端先細りならず平坦である。イヌノキ製の同定は、現在のこの 1 点であり未成品等もみられないことから、搬入品として考えられ、第 6 部第 1 章における能城修一氏他の樹種同定分析の中から、九州地方から山陰地方と日本海側經由を経てたらされた可能性が高いことが記載されている。

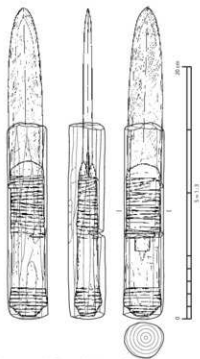
3 は、コナラ属アカガシ亜属製の不明の部材である。出土地は 13 地区埋積浅谷出土で詳細な時期は不明瞭であり、集落Ⅱ期以降、弥生中期の範疇にはいるものと考えられる。

割材を利用して二股に作りだされている。又鋳片の再利用か。

4 は、イヌガヤ製の不明部材である。出土地は 15 地区環濠 11 出土で、時期は八日市地方 5-6 期、集落Ⅱ期に該当する。芯持ち丸木で両端に加工面がみられることから完成品である。片側平坦面を作り出し、やや中央からずれたところに深い切り込みが入る。この形状から推定される製品として剣把があげられる。

第 1 図は把付磨製石剣の把部と合成した図である。把付磨製石剣の把はカヤ製芯持ち丸木材を利用している。把付磨製石剣は第 2 図のように把間から把縁の上半部を二枚合せにして石剣を挟みこみ、受け側には凹部を削り出し、覆い剣を凸形にして嵌め込む仕様である。切り込み部から上方を、半裁したもので凹部をもつ覆い剣を作成するには、凹凸部の重なり分の長さが余分に必要となる。そういった意味では、4 の部材は把付磨製石剣の把の長さを想定するにはちょうど良い形状のものと考えられる。ただし、把付磨製石剣の時期は八日市地方 8 期新相当であり、4 の部材の時期とは異なるが、材質・形状からの可能性の 1 つとして提示したい。

5 は、ケヤキ製コップ形未成品と考えられる。出土地は 26 地区埋積浅谷灰色埴土Ⅰ、Ⅱ層で、八日市地方 9-10 期、集落Ⅲ期に該当する。心去り割材を多角柱に加工し、上面は斜めに切り落としている。側面には、刃のあたりがつく。



第 1 図 磨製石剣との合成(5=1/3)

6・7は楔である。6はツバキ製芯持ち丸木材で先端にかけて薄く削り落としていた。出土地は26地区埋積浅谷灰色粘土I・II層で、八日市地方9-10期、集落III期に該当する。

7はコナラ属コナラ節製を芯去り削り出して、多角柱に作り出し、先端に向けて薄くケズリ落としていた。元々、長かったものが欠損したものを上端には加工面がみられるため、先付けし直した可能性が高い。出土地は26地区埋積浅谷出土で、集落II～III期相当である。

8はケヤキ製の切断材Cである。出土地は、12地区埋積浅谷2層で、八日市地方7-9期、集落II～III期に該当する。

芯去り材、縦木取りで角柱状を呈し、両端に加工面がみられることからほぼ完成品である。中央に擦り切り痕がみられ、報告II木器編第X章1286に類似する切断材B類の前工程品にあたるものと考えられる。ケヤキ材を利用したものの用途分類(第6部第1章 能城他表1)をみると、もっとも利用されている用途として容器があげられる。

しかし、第3図の形状からは細身の容器としてコップ形容器が候補としてあげられるが、成品に比べ、1217・1266では幅が足りないとも見受けられる。

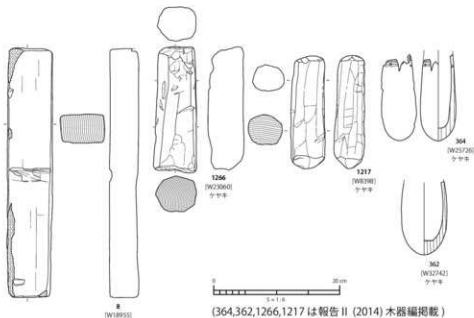
よって、下記のケヤキ製切断材の利用法は検討の余地があるものと思われる。

9はスギ製の切断材Bである。出土地は、12地区環濠04 2層出土で八日市地方6期、集落II期に該当する。芯去り割材、柁目材で、両端に加工痕がみられ完成品である。

10-13は鉄器使用痕の可能性として提示するものである。



第2図 把付磨製石剣の把作成分案  
(櫻田作成)



第3図 ケヤキ材における切断材(S=1/6)

10 はスギ製、切断材 C である。出土地は、26 地区埋積浅谷下層出土で八日市地方 5-6 期、集落Ⅱ期に該当する。芯去り割材、柱目材で、両端に加工痕がみられ完成品である。下端の刃跡は、鋭利に食い込む刃跡が確認でき、鉄斧利用の可能性が高い。

11 は、詳細な材質は不明であるが針葉樹材である。木取りは芯持ち丸木材で、枝部分を鋭利な工具で裁ち、両端に加工痕がみられる。鉄器利用を想定している。出土地は 26 地区埋積浅谷 8-1 層、八日市地方 7-8 期、集落Ⅱ期に該当する。

12 はイヌガヤ製、芯去り割材である。出土地は 26 地区埋積浅谷灰色埴土Ⅲ層、八日市地方 9 期、集落Ⅲ期に該当する。下端には、刃幅 5.5 cm 程度の伐採時の鉄斧痕跡、上端には刃幅 2cm 程度の鉄斧痕跡がみられる。樹皮が残存しており、節部分にも鋭利な加工痕跡がみられ、内側には平らに製材した刃跡痕跡が確認できる。以上のように、12 は刃幅の違う鉄製工具の利用が想定され、伐採時と加工時の工具利用の差が確認できる好資料である。

13 は詳細な材質は不明であるが針葉樹材、切断材 B である。木取りは、芯持ち丸木材で形成層は切除し、多角柱状に加工している。また、両端にも加工面が確認されることから完成品である。全体にみられる加工痕跡としては 2cm 程度の刃幅の鉄製工具利用が想定される。出土地は 26 地区埋積浅谷灰色埴土Ⅱ層、八日市地方 9-10 期、集落Ⅲ期に該当する。

なお、4 の剣把の可能性を示したのも鋭利な刃物による加工痕跡が確認される。

第 4 図は、鑄造鉄斧及び鉄器使用痕跡と思われるものを時期ごとに比較したものである。

詳細な時期がわかる資料は 7 割程度あり、鑄造鉄斧の柄は 11 地区環濠 06 から 2 点みつかったことから、八日市地方 7 期には鉄斧の存在を確認できる。

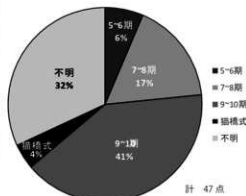
また、鉄器使用の可能性があげられる遺物の多くは、伐採時の縦斧使用と想定するものである。鉄器使用の可能性としてあげているものには、刃跡が食い込む痕跡や刃こぼれ痕と思われる条数の凸部が確認できるものを対象としている。

劣化の激しい広葉樹材での鉄器使用を確認するのは困難であり、逆に針葉樹材は劣化が少ないため確認しやすい。

鉄器使用の可能性があげられるものは八日市地方 5-6 期から少量みられ、9 期以降に多くみられるようになることから、遺跡内における鉄器の普及が進んだものと考えられる。

不明としたものの多くは 9 期相当のものと考えられる。

なお、今回鉄器使用の可能性として提示している以上に数多くみられるものと考えている。



第 4 図 鉄斧及び鉄器使用痕

## 第 2 節 材質同定及び年代測定対象資料について

第 6 部において提示した資料は、報告 I (2003)、報告 II (2014) 及び未掲載の遺物が対象である。本節では、すべてが報告済み資料ではないため、補足として可能な限り、遺物写真及び出土地、時期等の観察表を提示するものである。

なお、当遺跡の樹種同定は能成地で実施したものに平成 8 年から平成 25 年にかけて保存処理業務に合わせて樹種同定を行ったものが 609 点ある。その中で、能成地樹種同定では存在が認められなかった、クロベ、サワラ、マテバシイ属等に関する 21 点に対して、プレバート観察による再鑑定を実施していただいた。その結果、第 1 表のとおり、すべてにおいて樹種が変更された。

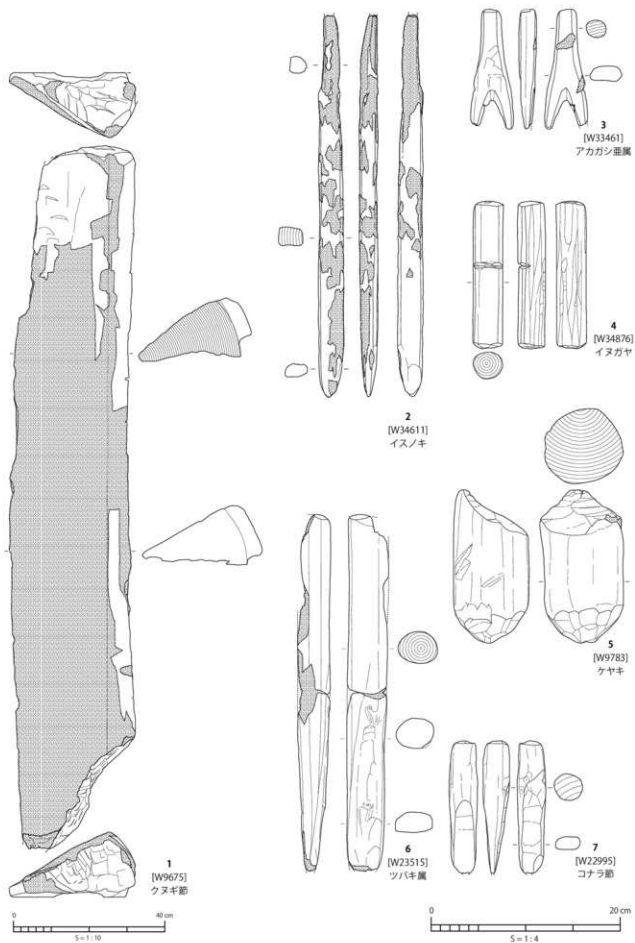
第 1 表 再樹種同定属性表

樹種	掲載情報	DBNo	大別	種別	属性 1	属性 2	木取り	遺構時期	Tag	長	幅	厚	高	径
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 263 回 099	32883	農耕具	鋤	一木造		板目	5 期	YKJ26 河川跡 No.2634 971222(F-3)	98.7	15.50	3.10		3.0
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 287 回 0003	32953	祭祀具	動物形	鳥形		板目	不明	YKJ12 25-63Gr 且河遺 排水溝掘削 971111	13.4	4.30	1.60		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 287 回 0004	32954	祭祀具	動物形	鳥形		板目	4-6 期	YKJ26 E-2Gr 河川跡下層 970424	13.8	3.40	1.40		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 289 回 0011	32961	祭祀具	動物形	鳥形		板目	9-10 期か	YKJ13 高倉上層 (1 層 2 層) 950817	12.1	6.30	1.60		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 290 回 0016	32966	祭祀具	動物形	鳥形		板目	5-7 期	YKJ26 河川跡 No.2590-1 971222(F-3)	14.3	5.60	1.30		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 290 回 0017	32967	祭祀具	動物形	鳥形		板目	9-10 期か	YKJ13 B-6Gr 高倉上層 (1 層 2 層) 950817	16.3	3.90	1.10		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 290 回 0018	32968	祭祀具	動物形	鳥形		板目	5-6 期か	YKJ13 B-11 C-11 D-11Gr 灰色砂層 970418	13.9	4.00	0.90		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 293 回 0019	32969	祭祀具	動物形	鳥形か		割材	10 期か	YKJ26 C-14Gr 河川跡 No.267 971024	19.9	6.40	4.70		
板:ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 292 回 0022	32972	祭祀具	動物形	鳥形	板差込	板目	5-7 期	YKJ26 河川跡 No.2449 971217(F-3)	14.0	4.60	1.20		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 293 回 0024	32974	祭祀具	動物形	鳥形		板目	8 期	YKJ26 C-13Gr 河川跡 13 ライン 14-1 層 981225	11.6	4.00	0.80		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 293 回 0026	32976	祭祀具	動物形	鳥形		板目	6-10 期	YKJ26 F-3Gr 中層 960702	16.0	4.30	1.00		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 292 回 0028	32978	祭祀具	動物形	鳥形		板目	10 期	YKJ26 河川跡 No.5368(C-13 灰 1)	23.5	5.50	2.20		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 298 回 0043	32993	祭祀具	動物形	木偶		板目	6-8 期	YKJ26 河川跡 No.1525 971108(F-3)	11.1	5.30	2.60		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 300 回 0051	33001	祭祀具	武器形	剣形		追柱目	5 期	YKJ26 河川跡 No.3056 980507(F-5 9 層)	29.4	5.40	1.20		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 301 回 0062	33012	祭祀具	木織	扁平織			7-8 期	YKJ11 E-4Gr ミソ 7a 下層 951220	21.9	2.00	0.90		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 301 回 0063	33013	祭祀具	木織	栓状織			10 期以降	YKJ26 E-10Gr 河川跡 No.14 970804	23.7				1.0
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 303 回 0082	33031	祭祀具	舟形			横木取り	6-10 期	YKJ26 D-6Gr 中層 960415	17.2	2.20		1.0	
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 304 回 0084	33032	祭祀具	舟形			横木取り	6 期か	YKJ12 30-55Gr ミソ 01 2 層 981124	30.7	5.90		4.0	
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 304 回 0089	33037	祭祀具	舟形			横木取り	5-6 期か	YKJ26 河川跡 No.9679 980819(9 層上面)	26.5	4.90		3.0	
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 312 回 0004	33057	武器・ 武具	槌	無紐式		板目	5-6 期か	YKJ13 C-5Gr 下層 アゼ 951223	16.0	34.50	5.00		
ツグノ木 ↓ ツグノ木	1 第 353 回 0003	33174	雑具	把手		大型	割材	6 期	YKJ12 29-56Gr ミソ 01 園 No105 No.1868 980818	68.0	6.70		9.0	4.0

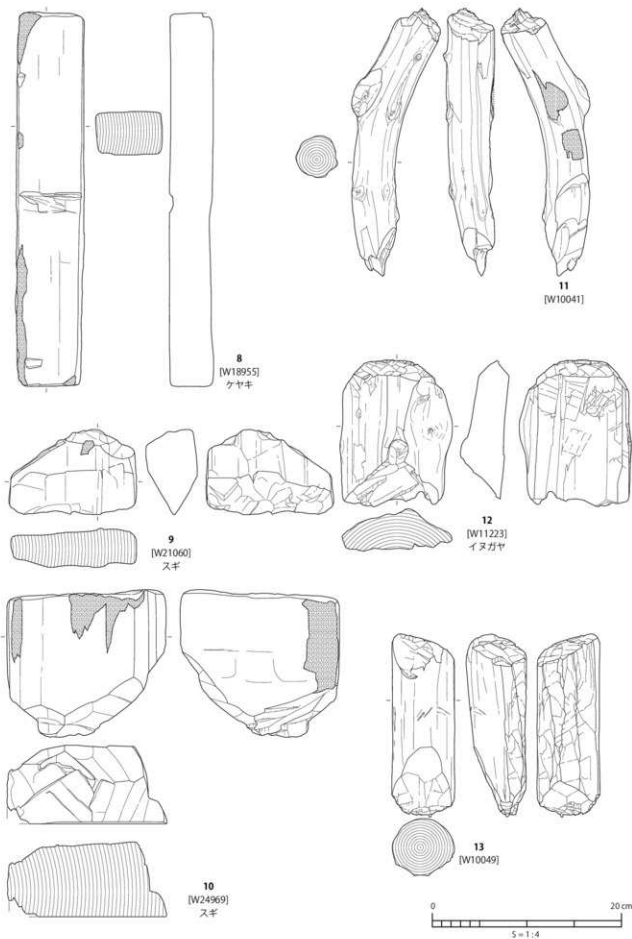
\*は、報告 1 (2003) の観察表内では、どちらも `スギ` としての表記をしていたものであるが、分析結果は上記表のとおりであったものである。

#### 【木器凡例】

- 1) DB No は八日市地方遺跡の出土品整理番号である。
- 2) 遺構時期、時期標記に関しては、例言のとおりであり、属性表内は八日市地方 1 ~ 10 期の標記とする。  
ただし、時期に関しては、遺構、層位で捉えた表記であり、必ずしも記した時期が遺物の当該期とするものではない。
- 3) 掲載情報は「I 第〇〇回〇〇」は八日市地方遺跡 I 2003 報告分、「II 第〇〇回〇〇」は八日市地方遺跡 II 第 4 部木製品に該当する。
- 4) 大別、種別、属性、木取りは八日市地方遺跡 II 第 4 部木製品の木製分類表に準ずる。
- 5) Tag は出土場所地点を示す。
- 6) 計測値は 0 は残存値を示す。
- 7) 編組製品等資料 1-4 の掲載写真は小林一貴他 4 名の共同研究にて撮影されたものである。



第1図 補足木製品 (9675:S=1/10, 他 S=1/4)



第2図 補足木製品 (S=1/4)



KYJ-572(W25452)



KYJ-601(W25383)



KYJ-1001~1002(W33185)



KYJ-1003~1005(W33184)



KYJ-1006~1007(W33186)



KYJ-1008~1009,2164,2165,2166(W33190)

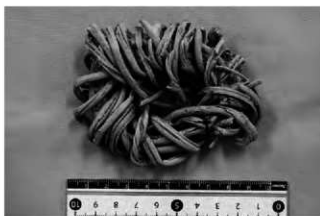


KYJ-1011(W33205)



KYJ-1301(W33212)





KYJ-1303(W33202)



KYJ-1304,2120,2121(W33207)



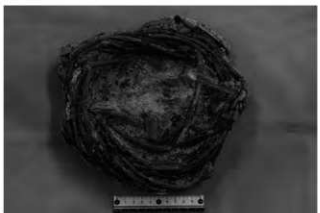
KYJ-1305(W33211)



KYJ-1306(W33204)



KYJ-1307(W33206)



KYJ-1312(W33210)

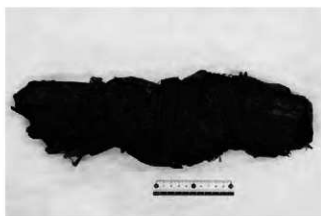


KYJ1339(W33879)

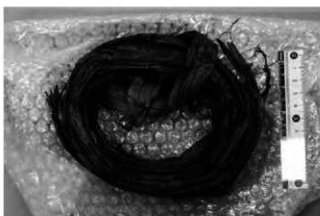


KYJ2106(W33119)

補足資料.3 編組製品等資料 3



KYJ-2108(W35301)



KYJ-2109(W33201)



KYJ-2112(W25156)



KYJ-2116(W35299)



KYJ2124~2128(W35298)



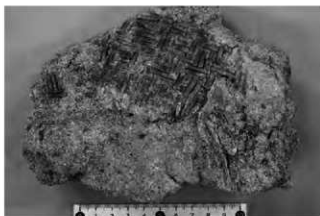
KYJ2129(W35168)



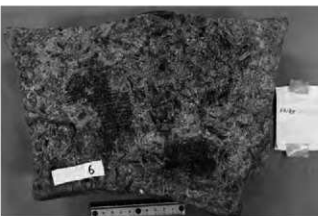
KYJ2130,2133,2134(W35297)



KYJ-2137,2139,2140,2142(W35153)



KYJ-2144,2147(W33189)



KYJ-2148,2150(W33188)



KYJ-2153,2155,2156(W35801)



KYJ-2158,2159,2161(W35296)



KYJ-2162(W33200)



KYJ2174(W33193)



KYJ-2175(W33195)

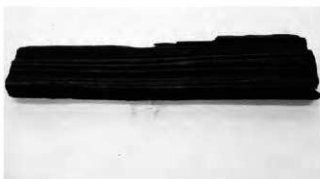


KYJ-2176(W33196)

補足資料.5 年輪年代測定対象資料 1



資料 1 木棺 小口板 (W32738)



資料 2 板材 (W9268)



資料 3 不明木製品 (W33933)



資料 4 鋤形木製品 (W34969)



資料 5 不明木製品 (W33247)



資料 6,20 板材 (W22625)



資料 7 不明木製品 (W9256)



資料 8 不明木製品 (W21029)



資料 9 棒状製品 (W24432)



資料 10 丸柱 A(W31034)



資料 11 丸柱 B(W31032)



資料 12 丸柱 C(W31035)



資料 13 丸柱 D(W31033)



資料 14 柱根(半截)(W33277)



資料 15 板 A(大)(W23716)



資料 16 不明木製品 (W33699)

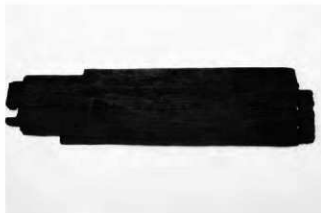
補足資料.7 年輪年代年代測定対象資料 3



資料 17 田下駄 (W25236)



資料 18 板材 (W23413)



資料 19 板材 (W34971)



資料 21 板材 (W13720)



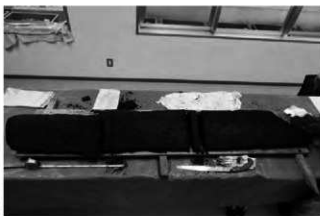
資料 22 板材 (W19921)



資料 23 礎板 (W27167)



自然木 (W9660)



ミカン割材 (W9675)



ミカン割材 (W14518)



柱根 (W28510)



柱根 (W28605)

## 測定資料 年輪年代測定属性表

No.	DBNo	遺構時期	記載情報	大別	種別	属性1	属性2	木取り	Tag	長	幅	厚	径
1	32738	7期	Ⅱ第110回0966	施設材	箱	小口		追極目	YKJ20 SX02 主体部 060530	(20.6)	(30.00)	2.30	
2	9268	5-6期		その他	加工材	板材		追極目	YKJ17 E-8Gr SD2 V区下層 971115	86.2	4.00	20.50	
3	33933	7-8期か	Ⅱ第133回1278	その他	加工材	C		別材	YKJ13 C-9Gr No.351 979092	11.0	13.85	14.70	
4	34969	9期か	Ⅱ第014回0097	農耕具	鋤	組合せ	B	板目	YKJ13 C-4Gr 中層(4層) 951026	(22.8)	(13.10)	0.95	
5	33247	8-9期か	Ⅱ第133回1279	その他	切斷材	C		別材	YKJ13 C-3Gr 中層 951019	12.8	23.20	9.5	
6	22625	9-10期		その他	切斷材	A		追極目	YKJ11 N-4Gr 上段 29 最下層 960616	(17.1)	(18.90)	(3.40)	
7	9256	7期	Ⅱ第059回0459	雑具	部材	種か		板目・横木取り	YKJ17 H-3Gr SD44 11区 下層 971110	(54.8)	9.60	(10.70)	
8	21029	6-9期		建築部材	その他				YKJ12 30 55Gr SD01 第1層 981023	(159.6)	2.10	(14.90)	
9	24432	10期		その他	加工材			別材	YKJ26 河川跡 5-1 層 木ベルト 1 D 981105	(143.8)	7.20	4.00	
10	31034	6-7期か	Ⅱ第063回0488	建築部材	柱材	柱根		芯無し・削出し	YKJ11 M-5Gr SD24 柱 a 961225	(44.3)			17.6
11	31035	6-7期か		建築部材	柱材	柱根		芯無し・削出し	YKJ11 L-5Gr P616 961225	(25.3)			16.5
12	31032	6-7期か		建築部材	柱材	柱根		芯無し・削出し	YKJ11 L-5Gr P590 961225	(34.3)			17.4
13	31033	6-7期か		建築部材	柱材	柱根		芯無し・削出し	YKJ11 M-5Gr SD24 柱 c 961225	(25.0)			16.7
14	33277	7期か	Ⅱ第067回0521	建築部材	基礎か			板目(辺材)	YKJ17 H-9Gr P3 960527	(59.4)	45.40	21.60	
15	23716	9-10期		その他	切斷材	A		追極目	YKJ26 E-10Gr 河川跡 8-3 層 アゼ 内 981028	19.1	37.80	3.40	
16	33699	7-9期		その他	切斷材	A		板目	YKJ13 C-3Gr 中層 951106	23.6	2.80	(20.50)	
17	25236	7-10期		農耕具	田下駄			追極目	YKJ26 B-3Gr 6層 7層 950829	28.6	2.30	18.70	
18	23413	9期		その他	切斷材	A		板目	YKJ26 F-15Gr 河川跡 員目 990105	8.0	(12.70)	2.20	
19	34971	9-10期か	Ⅱ第101回0860	その他	組み物	敷板	A2	板目	YKJ13 B-6Gr 竇倉上層(1層 2層) 950809	11.8	(45.10)	1.05	
20	22625	9-10期		その他	切斷材	A		追極目	YKJ11 N-4Gr 上段 29 最下層 960616	(17.1)	(18.90)	(3.40)	
21	13720	7-10期		その他	切斷材	A	鉄釘使用か	追極目	YKJ26 C-4Gr 6層 7層 951017	16.0	2.20	20.90	
22	19921	9-10期		その他	切斷材	A		板目	YKJ12 26-64Gr 目田道 第1層 2nd 971023	21.1	4.10	(31.60)	
23	27167	9-10期か		建築部材	礎板か			別材	YKJ11 L-4Gr P107 960527	29.0	7.50	17.00	

1) 年輪年代測定表Noは光谷拓実氏の測定した資料番号である。

## 測定資料 セルロース酸素同位体比年代測定属性表

DBNo	遺構時期	種別	属性1	属性2	木取り	Tag	長	幅	厚	径
9660	1期以前	丸材	丸太		芯持ち・丸木	YKJ26 E-10Gr 河川跡 自然木 {サンブル} 981203	15.5			23.5
9675	9期	Ⅲ第1回0001	別材	鉄釘伐採痕有り	法割	YKJ26 河川跡 No.A107C.11.12 (板目床)	(186.3)	15.20	30.10	
14158	6-10期	別材	みかん割材	節有り	別材	YKJ26 E-5Gr 中層 960424	27.6	18.30	29.30	
28510	弥生中期	柱材	柱根		別材	YKJ13 H-5Gr H5-08-P 960823	(44.0)	15.00	10.00	
28605	9-10期	柱材	柱根		別材	YKJ13 G-9Gr G9-22-P 971007	(54.5)	12.50	22.20	
33699	7-9期	切斷材	A		板目	YKJ13 C-3Gr 中層 951106	23.6	2.80	(20.50)	



## 第二章 補足掲載する特殊土器

### 第1節 絵画資料

#### 1. はじめに

本節は、第V章土器編内で掲載した絵画資料及び報告Ⅰ（2003）で報告しきれなかった埋積浅谷、包含層出土の絵画片をまとめたものである。なお、報告Ⅰでは掲載できなかったシカの群れと狩人を描いた絵画土器の拓本や、人形土製品の股部を修正図化したもの、そして、報告Ⅲ（2008）において、同一個体であるが別個体との誤解を招くおそれがあったものも、今回、再提示している。

#### 2. 新資料の絵画土器について

754は、全形のわかる壺であり、胴部上半には禾本科系工具でシカが描かれている。図化できていないが、口縁部内面には、シカを描いたものと同一工具で、1条の線が部分的に描かれている。

1118は、壺の胴部上半部片である。土器片上部には鋭利な工具によるもので、土器片上部にわずかに残存する横線1条と、縦線2条、右側縁上部に縦線1条がみられる。左向きのシカか。

1119は、壺の胴部上半部片である。禾本科系工具により、右向きのシカを描いている。頭部「へ」の字に描いた後、脚、角耳をたしている。シカ胴部上にみられるものは矢を示すのであろうか。

1120は、壺の胴部上半部片である。26地区SK93内1.2層から出土している。SK93土坑内からは7期が出土しているが、重複する26地区SK77の時期である9期相当が上層位からみられているため、9期に位置づけられると考えられる。禾本科系工具により、左向きのシカを描いている。弧状に胴部を描いた後、角耳と脚をたしていることがわかる。

433は、方形周溝墓（17地区SX02）の供献土器であり、壺胴部下に禾本科系工具で描かれたものがみられるが、なにを描いているかは不明である。

1041は、壺の口頸部のみ残存する。口縁内面に鋭利な工具で鉤状と右向きのシカが描かれている。

壺の形状はやや緩やかに外反するものの直口に近く、決して、描くに容易な位置ではない。外から見えにくい内面に描いたのは、特別な意味が込められているのであろうか。

1043は、壺の口頸部のみ残存する。5本1組の禾本科系櫛状櫛状工具で、左向きのシカと不明絵画、「V」ないしは「W」状の絵画がみられる。また口縁内面には、同一工具による直線文が1条施されている。口縁は水平ではないことから、水差し形土器の可能性が考えられる。

1121は、壺の胴部片である。禾本科系工具により、「W」だろうか。線の左端が磨耗しており、延長するかどうか不明瞭である。

1122は、壺の胴部上半片である。禾本科系工具により、先端が「L」字形に曲がる2本の脚と胴部表現と考えられる線が剥離下に1条確認できる。脚の向きから右向きのトリカシカか。

768、1123は、禾本科系工具により不明な絵が描かれている。768は壺の口縁部外側、1123は壺の胴部上半部片である。

1124は、壺の胴部上半部片である。禾本科系工具による「J」の字状が確認できる。脚であらうか。

991は、壺の胴部上半に禾本科系工具により、シカに類似した絵が描かれている。

711・1125・1126・1127・1128は、3mm程度の太目の柔軟な工具で、弧線や丸といった記号文が描かれている。1125は、被熱しており、外面には煤が付着している。

727、520は禾本科系工具による矢印状や弧線文といった記号文がそれぞれ描かれている。

### 3. 絵画資料の時期と器種について

八日市地方遺跡で出土した絵画資料は、遺構ないしは埋積浅谷内で層位が確定しているものを勘案すると、ほぼ9～10期の範疇に収まることがわかる。描かれる器種としては、凹線文出現以降に主体となるハケ調整の短頸甕がもっとも多い。また、記号文は、弧線や矢印状、丸がみられ、器種としては、壺以外に鉢にも描かれている。

### 4. シカの絵画について

当遺跡内で、シカはもっとも多く描かれるものであり、報告Ⅰ（2003）で7点、報告Ⅲ（2008）で1点、本報告では5点及び可能性のあるもの1点があげられる。

これらの資料を深澤氏のシカ絵画の分類型式<sup>11)</sup>に基づいて分類すると、へ字単輪型式に該当するもの2点(754・報告Ⅰ-20)、へ字単車型式3点(報告Ⅰ-1・1043・1119)、斜線単車型式1点(1120)、斜線単輪型式1点(人形土製品(報告Ⅰ-17)、斜線輪型式1点(1041)、胴部のみ残存し輪郭表現になるもの2点(報告Ⅰ-9・報告Ⅰ-21)、胴部のみ残存し単線表現のもの2点(報告Ⅰ-8・報告Ⅲ-223)となる。報告Ⅰ-7は二頭のシカが胴部上半に描かれており、左側のシカは、角耳、胴部、後ろ足、右側のシカから頭部から頸部がみられる。この二頭のシカが同様な絵を描いたものとして考えると、報告Ⅰ-7は唯一V字単輪型式に相当することになる。

総じて、当遺跡から出土するシカの頭部表現は、前述の1点(報告Ⅰ-7)を除き単線である。頸部、胴部表現としては、単線と輪郭で描かれるものに分かれ、単線は6点、輪郭は7点である。

前掲深澤氏の見解によると、「北部九州地域における中期前葉の鹿絵は、へ字単車型式にあたり、頭部へ字型式に一筆型式と一線型式とがあった。これらの北部九州地域の鹿絵は、畿内・和歌山県北西部地域の最古型式と頭部・頸部・脚部の各型式が一致する。胴部だけが異なり、北部九州地域が単線型式であるのに対して、畿内・和歌山県北西部地域が輪郭型式である」という。そして「へ字単車型式の鹿絵は、(中略) 畿内・和歌山県北西部地域で未発見という事実を重ねると、へ字単車型式は、北部九州地域から日本海側地域を経て愛知県地域に到達した可能性が高い」とされた。

さて、一筆単車型式を最古とし複線型式へと変化する時期的な変遷についてであるが、当遺跡の出土資料では、頭部と頸部、胴部表現の差異を、9期から10期の土器変遷における時間的なもので細分するのは困難である。

そこで、地域的な交流関係を考えてみたい。八日市地方遺跡におけるシカの絵画土器が盛行する9期以降は、新たに凹線文系土器が流入する時期にあたる。凹線文系土器の流入ルートとしては、ルート1(北部九州→因幡→北陸にいたる日本海沿岸ルート)、ルート2(播磨→畿内北部(加古川・由良川)→近畿北部→北陸)、ルート3(播磨→畿内北部→近江西部→北陸)が想定されている<sup>2)</sup>。

八日市地方遺跡では、シカの群れと狩人を描いた絵画土器の印象が強く、シカの胴部表現では、単線による表現が主流であるように思われがちである。しかし実際には、胴部輪郭表現のものもほぼ同数ないしは、比較的多く見られるのである。

へ字単車型式の伝播ルートは、深澤氏の見解から推測すれば、ルート1に該当することになる。しかし土器様相から見た凹線文系土器の流入ルートとしては、ほかにルート2あるいはルート3といった複数ルートが想定されているのであり、畿内地域に多いとされる胴部輪郭表現のシカが比較的多く共存している傾向は、こうした想定されている複数の流入ルートと一致した傾向と言えよう。

## 第2節 特殊土器

1129は、遺存率は悪いが、底部に対し方形を呈するため、木製合子模造品と考えられる。

1113は、内面調整と形状から図の方向を天地として図化したものである。貼付突帯が1条縦方向にみられる。

1130は、人面付土器である。共存する12地区35-65-02 Kの土器は7期併行であるため、7期相当と考えられる。頸部より下は欠失し、正置した状態で顔面はかなり斜め上方を向く。顔面の遺存は悪く、辛うじて右側の眉、目と耳の表現、顔の輪郭が確認できる。後頭部は、一辺10cm程度の略方形に大きく開口する。全体的に丁寧なハケ調整で作られており、顔面表現に関わる粘土貼付部分や頸の表現を強調する部分には丁寧なミガキ調整がみられる。耳にあたる部分には、三日月状の剥落痕が明瞭で、中央の立ち上がり部には、二つの小さな貫通孔が並んでいたことも観察される。

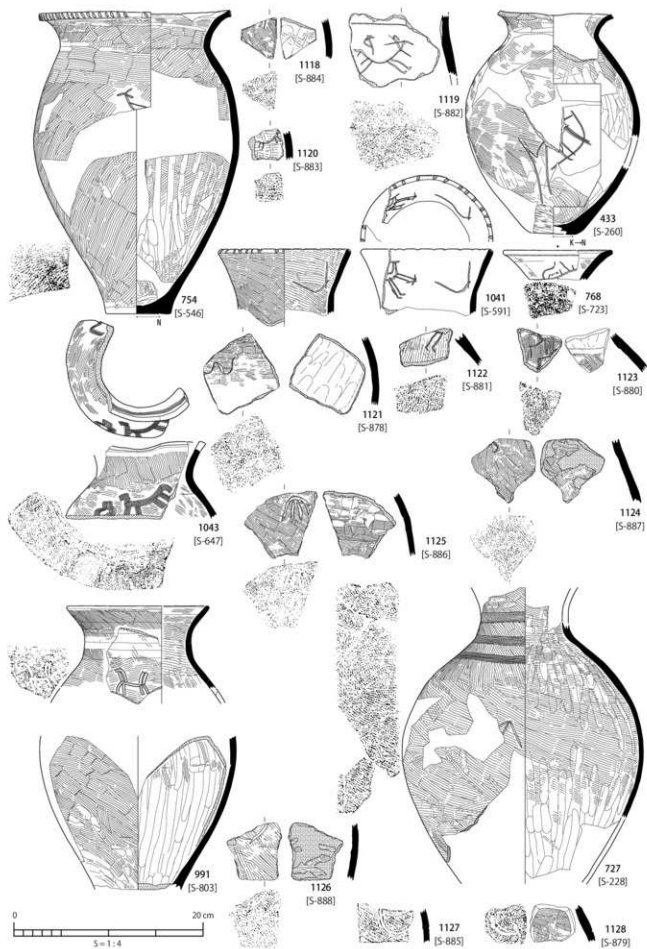
側頭部には、額から後頭部に向けて斜めに下がる突帯表現が1条みられ、鉢巻状のなにかを付けていた痕跡であろうか。突帯の中央には、4箇所の小さな未貫通の穴がみられる。また頸部は、色調の異なる剥離した箇所に、ナナメ方向にみられる傷が複数個所連続してみられることから、なにか付着装飾（例えば玉飾りなど）があったものと想定できる（深澤氏ご教示による）。1130の発見により、人面付土器は3点となった。いずれも形状の異なるものである。

今回の人面付土器の発見は、石川日出志氏、深澤芳樹氏をはじめとした弥生時代研究者からのご教示によるものであり、今後も同一個体、接合資料の探索を進めていきたい。

## 註・参考文献

- 1) 深澤芳樹 2014「一色青海遺跡出土壘形壺の産地をめぐって」『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第186集 一色青海遺跡Ⅲ 遺物』公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター  
2) 福海貴子 2003「第Ⅵ章 考古学的分析 第1節 八日市地方遺跡出土土器の検討」『八日市地方遺跡Ⅰ』PP144-148

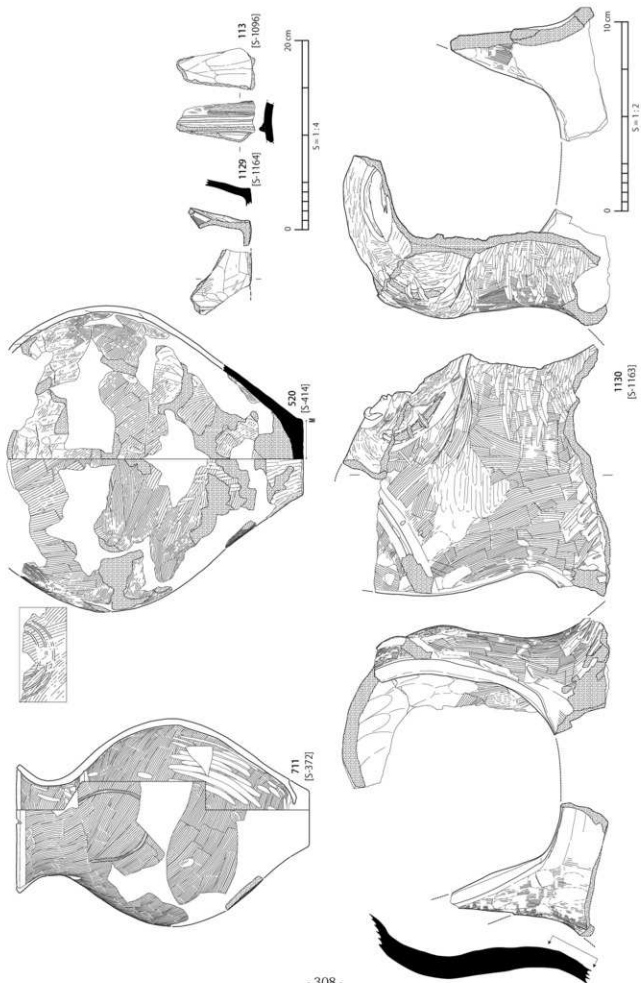
図版No.	ID	時期	調査区	GR	遺構名	層名	取上番号	器種	備考	色調	胎土	産成
113	S-1096	5-6期か	17		環溝 02 5区	上層		異形土器		10YR4/1 褐色	在地か	やや不良
433	S-0260	9期	17		SX02 V区			壺	不明絵画、 供獻土器	10YR8/2 灰白色	在地	良好
520	S-0414	9期	28	D-4	D4-06 K 1区			壺		10YR8/4 浅黄色	在地	良好
711	S-0372	9期	12		SX01 周溝 2区			壺	弧線文	10YR7/1 灰白色	在地	良好
727	S-0228	9期	12	33-65	33-65-02 K			壺	「T」記号文	10YR8/3 灰白色	在地	良好
754	S-0546	9-10期	13	F-11	F11-01B 木	上層		壺	沖	10YR7/2 に 赤い黄褐色	在地	良好
768	S-0723	9期	13	F-11	F11-01A 木			壺	不明絵画	10YR6/2 灰黄褐色	在地	やや不良
901	S-0803	9期	13	I-2	I2-20 K, 37-4			壺	沖か	10YR8/4 浅黄色	在地	密 良好
1041	S-0591	9期	11	C.5.I.5	SK24			壺	沖か、 シガ、駒	2.5Y7/2 灰黄色	在地	密 良好
1043	S-0647	9期か	11	H-9	H9-02 K			壺	不明絵画とシガ	10YR8/3 浅黄褐色	在地	密 良好
1118	S-0884	9-10期か	26	D-6	埋輪浅谷	中層		壺	沖	10YR8/4 浅黄褐色	在地	密 良好
1119	S-0882		16		SP25			壺	沖	2.5Y7/2 灰黄色	在地	密 やや不良
1120	S-0883	9期か	26	G.H-6	SK93 II区	1.2層		壺	沖	2.5Y7/3 灰黄色	在地	良好
1121	S-0878		11	A-4	非			壺	・胴部	10YR7/4 に 赤い黄褐色	在地	密 良好
1122	S-0881		12	34-64	包含層			壺	沖か	10YR7/2 に 赤い黄褐色	在地	密 良好
1123	S-0880		12	32-64	包含層			壺		2.5Y7/2 灰黄色	在地	密 良好
1124	S-0887	7-10期	26	E-5	埋輪浅谷	中層		壺	沖か	10YR7/2 に 赤い黄褐色	在地	密 良好
1125	S-0886	7-10期	26	D-6a	埋輪浅谷	中層		壺	記号文	10YR6/2 灰黄褐色	在地	密 良好
1126	S-0888	9-10期	26		埋輪浅谷		No.6704	壺	記号文	2.5Y6/2 灰白色	在地	密 やや不良
1127	S-0885	7-10期	26	D-6	埋輪浅谷	中層		壺	記号文	10YR8/2 灰白色	在地	密 良好
1128	S-0879		11	B-9	包含層			壺		10YR8/2 灰白色	在地	密 良好
1129	S-1164	7-10期	26	D-6	埋輪浅谷	中層		異形土器	木製合子模造品	10YR7/3 に 赤い黄褐色	在地	密 良好
1130	S-1163	7期か	12	35-65	35-65-02K, 35-65-03K	下層		異形土器		10YR8/2 灰白色	在地	粗密 良好



第1図 絵画資料 (S=1/4)

## 報告 I

第2図 絵画資料2(人形土製品 : $S=1/2$ , 其他 : $S=1/4$ )



第3図 絵画資料及び特殊土器(人面付土器・S=1/2, 其他・S=1/4)



754(S-546)



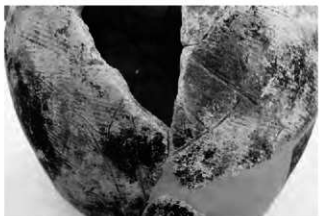
1118(S-884)



1119(S-882)



1120(S-883)



433(S-260)



1041(S-591)



768(S-723)



1121(S-878)



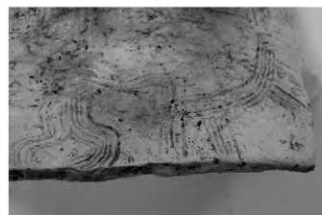
1122(S-881)



1123(S-880)



1043(S-647)



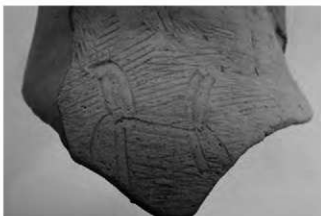
1043(S-647)



1125(S-886)



1124(S-887)



991(S-3)



1127(S-885)





1128(S-879)



報告Ⅲ 224,225



報告Ⅲ 220,223



報告Ⅲ 226,227,228

## 第三章 特定遺物の出土状況について

### 第1節 木器生産の傾向について

#### 1. 鉄斧と石斧の柄の出土分布について

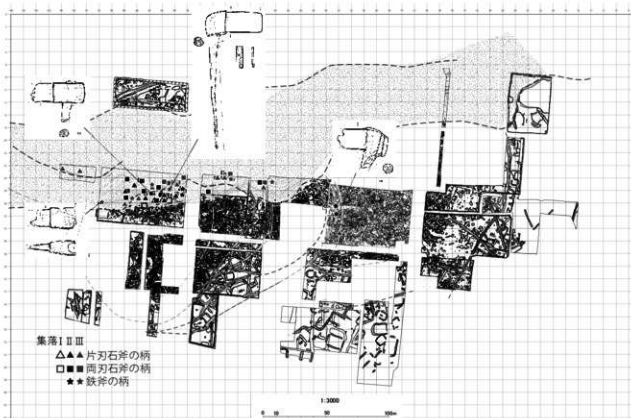
八日市地方遺跡では、現在のところ、八日市地方遺跡6-7期には鑄造鉄斧の柄がみられるのを最古とし、八日市地方10期までに計13点みられる。第1図は鑄造鉄斧の柄、両刃石斧の柄、そして片刃石斧の柄、それぞれの時期別分布図である。

鑄造鉄斧の柄は、11地区環濠06から2点みつがっているが、その他はすべて埋積浅谷からの出土である。12地区の1点、13地区の2点、いずれも集落Ⅲ期相当である。26地区では集落Ⅱ期相当が4点、集落Ⅲ期相当も同じく4点みられる。

両刃石斧の柄の分布をみると、集落Ⅰ期からみられる箇所は26地区のみで計26点みられる。13地区からは集落Ⅱ-Ⅲ期にかけて9点みられる。

片刃石斧の柄は、11地区環濠07内集落Ⅲ期が1点、12地区土坑内集落Ⅱ期が1点、環濠04内集落Ⅲ期が1点みられる。13地区埋積浅谷からは集落Ⅲ期相当4点、26地区埋積浅谷からは集落Ⅰ-Ⅲ期にかけて13点がみられる。27地区埋積浅谷からは集落Ⅲ期相当が2点みられ、時期を通じて26地区ではもっとも多くみられることがわかる。

斧柄の分布を時期ごとの変遷をみていくと、集落Ⅰ期では、鉄斧の柄はみられず、石斧の柄は26地区に限られていることがわかる。



第1図 鉄斧・石斧の柄出土状況 (S=1/3,000)

集落Ⅱ期では、石斧の柄は、12・13・26 地区内埋積浅谷肩部で数多くみられるが、鉄斧の柄に関しては、11 地区環濠 06 内と 26 地区埋積浅谷肩部に限定されている。

集落Ⅲ期では、鉄斧の柄は 26 地区埋積浅谷肩部に加えて、12・13 地区埋積浅谷肩部からもみられるようになるが、環濠内からの出土はみられない。石斧の柄は、1-2 点しかみられない 27 地区埋積浅谷や 11 地区環濠 07 内を除けば、鉄斧の柄の分布と概ね重なることがわかる。

## 2. 木器生産を示す木器の分布について

第 2～4 図は、未成品、切断材（残材含む）、割材等の集中により、木器生産箇所と判断したエリアを集落Ⅰ期からⅢ期に分けて示したものである。

集落Ⅰ期（第 2 図）は、すでに居住域が埋積浅谷の南北に展開しているものの、木器生産の規模は小さく、26 地区東側に限られている。

集落Ⅱ期（第 3 図）は、集落の拡大期であり、環濠が再掘削・拡張されるとともに、木器生産は埋積浅谷肩部だけでなく、環濠を利用する箇所もみられるようになる。環濠の利用は、環濠自体及び環濠に付随する形で掘り込まれた土坑を貯木施設とした木器生産で、12 地区環濠 04・11 地区環濠 06・07、17 地区環濠 03 と 04 合流箇所、16 地区環濠 04・06 でみられる。

集落Ⅲ期（第 4 図）は、集落規模が縮小するとともに、居住域、生産域は西へと移動して再び東東する動きをみせる。そして木器生産場所は、再び集落Ⅰ期同様、埋積浅谷肩部やその周囲の貯木土坑に限定されるようになる。

第 1 表は、木器生産に伴う切断材や割材、そして器種がおおよそ判明している未成品の数量を各期で把握した木器生産地点ごとに集計し、比較したものである。

集落Ⅰ期に 26 地区東側の埋積浅谷肩部で成立した木器生産箇所では、主要な器種が網羅的に製作されていることがうかがわれる。

集落Ⅱ期では、26 地区に次いで 11・12 地区の環濠箇所でも多くの木器生産がみられる。しかしながら、この環濠における木器生産は、工具、農耕具、弓に限定されており、容器、食器の製作はみられない。

集落Ⅲ期では、26 地区の埋積浅谷は、切断材も多く、農具、容器・食器等多くの器種を集中して製作しており、他の調査区との比較では、全時期を通してみても、かなり突出した生産規模であることがうかがわれる。

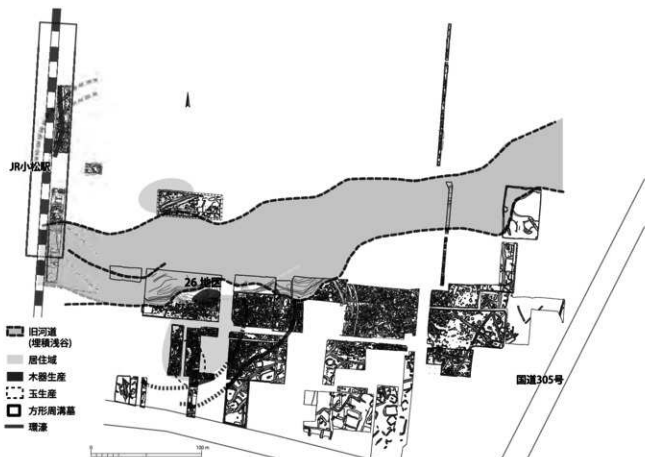
## 3. 木器生産箇所と斧柄の分布比較

斧柄分布図と木器生産箇所を比較して検討する。

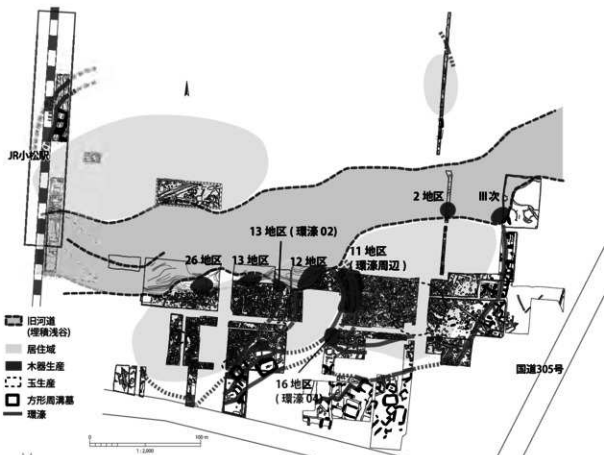
集落Ⅰ期では、木器生産箇所と斧柄の出土位置は、ともに 26 地区のみであり、その分布は重なることがわかる。

集落Ⅱ期では、埋積浅谷肩部から離れた 16・17 地区環濠内の木器生産箇所において、石斧の柄及び鉄斧の柄のどちらもみられず、木器生産箇所で斧柄が必ずしも伴うわけではないことわかる。しかしながらその一方で、11 地区環濠 06 の木器生産箇所では、集落域で唯一鉄斧の柄が出土していることが注目される。

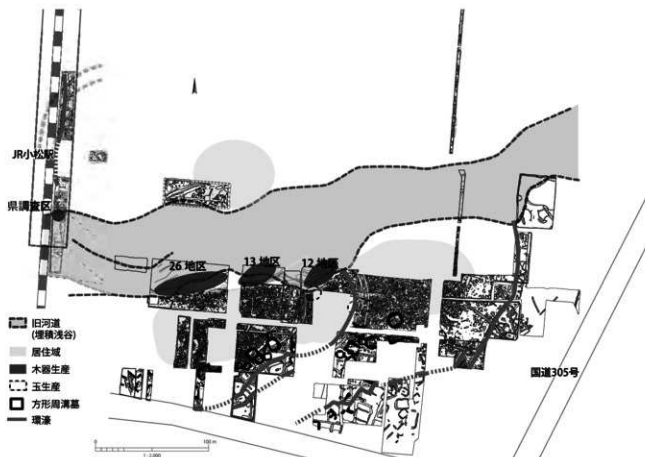
集落Ⅲ期では、木器生産箇所と、石斧の柄および鉄斧の柄の出土位置が、それぞれがほぼ重なっていることがわかる。



第2図 木器生産関連遺物集中箇所・集落Ⅰ期 (S=1/3,000)



第3図 木器生産関連遺物集中箇所・集落Ⅱ期 (S=1/3,000)



第4図 木器生産関連遺物集中箇所・集落Ⅲ期(S=1/3,000)

第1表 木器生産数比較表

集落	Ⅰ期				Ⅱ期				Ⅲ期					
	26 (河道)	26 (河道)	13 (河道)	13 (環濠)	16 (環濠)	11,12 (河道)	12 (環濠)	17 (環濠)	2 (環濠)	Ⅲ (河道)	県 (河道)	26 (河道)	13 (河道)	12 (河道)
工具	5	1	3		1	1				1	1	2	2	
農具	17	16	20	1	2	4	4			1	4	36	2	11
容器・ 食器具	10	4	5				4			1	1	9	1	1
弓	3	3	2			1	1							1
切断材A	24	24	7	2	1	26	9	3	1			64	10	7
切断材B	27	27	8	1	0	24	6		3			69	9	9
切断材C	7	7	10	2	2	14	3		3			34	2	5
ミカ割材	20	44	7	0	0	16	6	3	0			45	4	10
計	113	126	62	6	6	86	33	6	7	3	6	259	30	44

\*切断材とは両端に切断痕が確認されるもので、器種限定ができない、未成品もしくは残核と思われるものに該当。

Aは板状のもの、Bは多角形状・円柱状のもの、Cはそれ以外のもの(報告Ⅱ 2014 参照)

## 第2節 特殊遺物の出土状況について

### 1. 容器、食器の出土分布について

第5図は木製容器の中でも、盤、槽を除いた精製容器であるコップ形、高杯、合子、ジョッキ形等特殊容器の分布図である。

26 地区では、高杯、コップ形は集落Ⅰ期から集落Ⅲ期まで継続してみられる。集落Ⅱ期には、17 地区環濠 04、11・16 地区環濠 06、12 地区環濠 03A から容器の出土がみられるが、多くは埋積浅谷肩部であることがわかる。集落Ⅲ期には、11 地区環濠 07 から出土している合子を除いて、すべて埋積浅谷であり、13 地区から 26 地区に集中している。また、26 地区からは、ジョッキ形など特殊な形状の容器や桶形が出土している。

第6図は食器出土状況である。集落Ⅰ期は、26 地区で尠がみられ、容器と同様に集落Ⅲ期まで継続する。集落Ⅱ期になると、尠は 11 地区と 17 地区土坑内から出土しており、またこの時期から縦杓子が出現し、16 地区環濠 06、11 地区環濠 07 からも出土している。

精製容器、食器とともに時期ごとの出土地は類似しており、26 地区を筆頭とし、集落Ⅱ期には 11 地区環濠 06 内でみられる点は鉄斧の柄の出土地と同様であり、11 地区の特異性が伺われる。

### 2. 祭祀具の出土分布について

祭祀具に関しては、素材による出土地の偏りを知るため、木製と土製に分けて第7、8図に示した。木製祭祀具は、集落Ⅰ期には、26 地区埋積浅谷東側で鳥形、剣形、線刻板、舟形がみられる。集落Ⅱ期では、鳥形、剣形と 26 地区が数多く占める。人面付土器は、集落Ⅰ期～Ⅱ期にかけて 26 地区で 2 点みられ、集落Ⅱ期併行と思われるものが 12 地区土坑 (35-65-02-K) で出土している。集落Ⅲ期には、埋積浅谷から離れて墓群が展開する箇所から、魚形木製品が 2 点ともみられるのは興味深い。

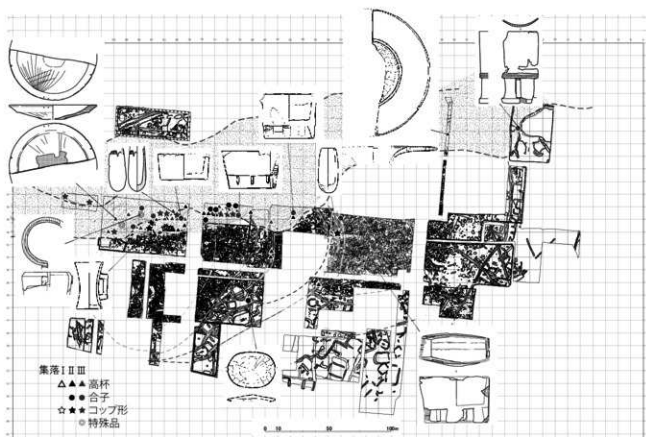
木偶や人物表現がみられる線刻板は 26 地区から出土しており、琴の天板 2 点とも調査区出土である。人形土製品 (土偶) は方形周溝墓出土で集落Ⅲ期に該当する。同方形周溝墓周辺の土坑から、シカの絵画資料が出土しているのは興味深い。他の絵画資料は埋積浅谷を除くと、住居跡ないしは方形周溝墓から出土している。

分銅形土製品は 11 地区、17 地区出土の 2 点を除き、26 地区埋積浅谷内に集中して出土しており、集落Ⅲ期にみられる舟形木製品も同様で、26 地区に集中していることがわかる。

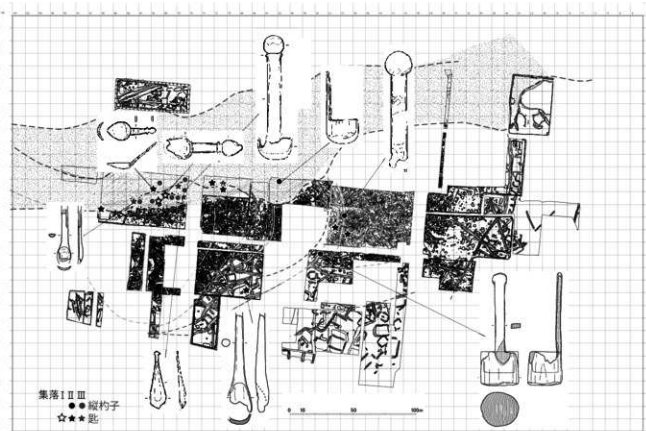
木製祭祀具を性質の異なる土製祭祀具分布と合わせて検討した結果、木器が良好に遺存する環境から埋積浅谷に偏ったのではなく、土製のものも同様に埋積浅谷に偏る傾向がみられ、さらに 26 地区に集中していることがわかる。

## 第3節 まとめ

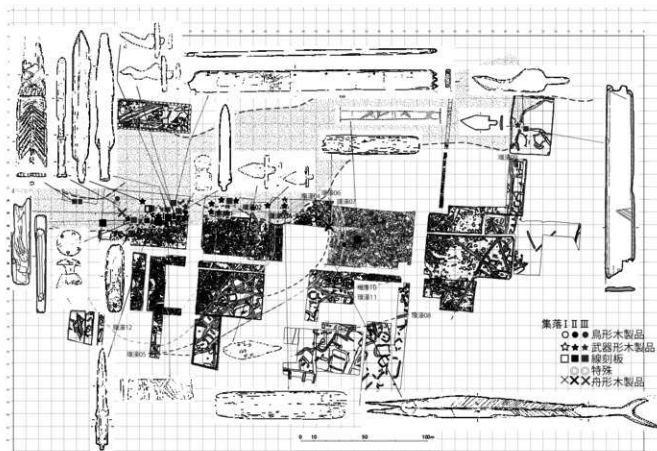
今回取上げた分布状況からは、出土量の多さと、弥生時代前期から後期まで長期にわたる土器が出土することなどから、遺跡内でもっとも環濠内側にあたる 26 地区の祭祀場且つ中心的な位置づけが検証できたものと考えている。さらに、祭祀具が土製か木製かに限らず、少数ながらも 11 地区で両者がみられる点に注目したい。前述した鉄斧の柄や容器、食器に加えて、分布図では示していないが、イスノキ製刺突具も 11 地区環濠 06 の出土であること、また、11 地区区内に芯去りの円柱に削りだされた建物や 1 軒×4 軒の建物跡がみられることは、集落Ⅱ～Ⅲ期にかけて、当調査区におけるの居住空間としての優位性を浮かび上がらせることができたものと考えている。



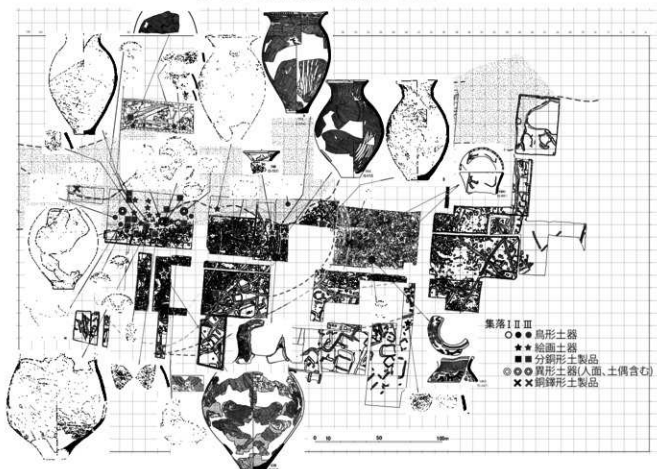
第5図 木製容器出土状況 (S=1/3,000)



第6図 食事具出土状況 (S=1/3,000)



第7図 木製祭祀具出土状況 (S=1/3,000)



第8図 土製祭祀具出土状況 (S=1/3,000)



## 第四章 科学的年代測定成果と広域編年

### 第1節 年代測定結果と試料の考古学的補足

本節は、第6部自然科学分析編で報告された、八日市地方遺跡出土資料の年輪年代、年輪セルロース酸素同位体比による年代、炭素年代、それぞれの測定結果に対して、分析資料に関する考古学的な所見を加えるとともに、その成果を総合的に捉え、八日市地方遺跡の変遷を実年代を踏まえた形で紹介するものである。

#### 1. 炭素年代測定対象資料

八日市地方遺跡の炭素年代については、2009年、報告1の時間軸設定で採用した土器を基に、八日市地方1期～10期の年代測定を実施した結果が公開された<sup>1)</sup>。各時期で推定された年代の箇所を以下に引用して紹介する。

八日市地方1・2期・・・1期は前550年頃を上限とする可能性があり、前400年頃を含む前6～前5世紀、2期は前4世紀前半であろう。

八日市地方3期・・・測定例がないため不明。

八日市地方4期・・・前4世紀中頃から後半

八日市地方5期・・・測定数が少なく大まかな推定の域を出ないが、前3世紀前半か。

八日市地方6期・・・前3世紀中頃の較正曲線の波高部分に相当する可能性がある。

八日市地方7期・・・測定数が少ないが前後の時期に挟み込まれる前3世紀後半であろう。

八日市地方8期・・・前200年頃を含む前3世紀後半から前2世紀初めか。

八日市地方9期・・・前2世紀前半であろう。

八日市地方10期・・・前2世紀後半であろう。今回測定した試料で見える限り、前100年が上限かと思われる。

上記の炭素年代は、すべて土器付着物を測定試料としたものである。今回の報告では、貝層出土の動物遺体、および埋積浅谷出土の木材、さらに、本遺跡出土の後期土器資料（猫橋式）を加えて、炭素年代測定資料を補足したことになる。

第6部第V章では、9期併行に位置づけられる貝層資料（第2図参照）を対象に測定を実施した。その結果、9期は紀元前205年～紀元前110年に収まるものとされ、これまでの成果と調和的との結果を得た。本分析では、動物遺体を対象とする場合に、それが何であるか（何を倒しているか）によって、測定結果が変動することを強調している。測定結果をみると、リザーバー効果の影響を受けやすい試料が総合的に把握できている。このことから逆に、本来海洋性の食料を倒しなないイノシシについて、飼育と野生の判断などに今後アプローチできると主張する。つまり、Ⅶ章でも触れられているが、土器付着物の測定に際しては、それが内面か外面かなど試料炭化物の起源物質が問題となる点についても示唆的と言えるであろう。

Ⅵ章では、年輪セルロース酸素同位体比の測定対象にもなったクヌギ節ミカン割材（W9675）について、その辺材部の炭素年代測定を実施した。その結果、紀元前185年～50年（95.4%）に収まるとしている。この測定結果は、年輪セルロース酸素同位体比の年代決定結果とも矛盾しない。なお、この資料は、前述した貝層の上層（灰色埴土Ⅱ層床直）に位置しており、貝層出土資料と比較す

るには好条件のものと考えている。

Ⅶ章では、弥生時代後期前半（猫橋式）に併行する土器を対象とし、土器附着物試料の測定を実施した。外面付着炭化物で、植物起源の燃料材由来と判断している。測定結果は、報告Ⅰ-603が紀元後80～220年（95.4%）、報告Ⅰ-606が紀元後25～40年（8.6%）、紀元後45～125年（86.7%）に取まるとした。その一方で、較正曲線の持つ地域性、特に紀元後1世紀から3世紀にかけての日本産樹木による較正曲線とのからみもあり、現段階では詳細に議論することは差し控えたいとしている。しかし、宮田氏が今回、本文中の図5において旧来の測定結果を改めたとおり、猫橋式より先行する戸水B式をBC50年前後とし、後出する月影Ⅰ式は紀元後160年前後としたならば、今回測定した弥生時代後期前半期における猫橋式併行の暦年較正年代は、おおよそ紀元後45～160年の範囲内に取まる測定結果を得たものと受け止めたい。

## 2. 年輪年代測定対象資料

八日市地方遺跡では、膨大な量の木器がみつかったにもかかわらず、スギ、ヒノキ材で年輪数を積んだ大形部材は以外と少なく、樹皮型、辺材型となると更に限られてくるのが現状である。

そういった中で、詳細な時期比定が可能な埋積浅谷層位資料や土坑資料等から、共存する土器と照合できるものとして、№1、2、6、7、9、15、18、20、22を抽出した。

この内、年輪年代測定資料として計測年輪数が高かったものに№1（32738）があげられる。スギ材の追い柵目の板材であり、20地区SX02内木棺小口に相当する。SX02は、周溝内の土器から7期併行の方形周溝墓であると考えられ、主体部に利用された木棺も同時期のものと考えている。本資料の年代測定が行われたのは2003年で、これまでBC297+ $\alpha$ として提示されていたものである<sup>2)</sup>。今回、平均年輪幅から推計した辺材部の年輪数を約70層と見積もったことにより、正式報告としてSX02の年代をBC220年以降と判断するに至っている。209層に及ぶ年輪が、暦年標準パターンと高い相関で一致する極めて良好な試料とされる。出土遺構の性格および共存土器の時期が明確であり、本遺跡の年輪年代測定試料として重要な資料と考えている。

ほかに年輪年代測定資料として良好なものでは、同一部材の可能性が高い№10～13、№16、№23があげられる。

№10-13は、一本の大径木を四分割して4本の精美な円柱を削りだしたと考えられるもので、環濠06にかかって発見されている（第Ⅴ章第16図参照）。環濠06の時期として想定している6-7期に併行すると捉えると、BC283年以降という年代は申し分のない時期となる。ただし、環濠産絶後に建てられた建物である可能性も考えられ、遺構の状況からは明確には判断しにくい。

№16（33699）は、狭小範囲として発掘調査を実施している95年度調査の埋積浅谷出土資料で、詳細な時期はわからない。ただ、13地区C-3Gr中層で取上げられている土器は、8期を主体とし7期から9期までの幅域をもつ土器が出土している。BC250年前後の年代が得られており、7-9期の範囲内に、BC250年が含まれる可能性を示している。尚、本資料は、年輪セルロース酸素同位体比による分析も行われており、同じ年代測定結果が得られている。

№23は、11地区K-4Gr P107の礎板資料であり、Pit内からは詳細な時期を示す土器の出土はみられない。しかし、1軒×2軒の建物（SB04）復元可能な柱穴1つであり、周辺の土坑の時期を加味すると、9-10期併行の建物の可能性が高い。№23はBC136年の年代が得られており、このことから、9-10期はBC136年を含む年代が考えられる。

### 3. 年輪セルロース酸素同位体比対象資料

今回、分析に供した6点のうち、年代が確定されたのは4点である。この4点のうち、共存する土器が照合できるものとしては、クヌギ節ミカン割材(W9675)樹皮型があげられる。鉄斧による伐採痕が明瞭な資料である(第7部第1章参照)。この資料は灰色埴土Ⅱ層床直出土であり(第2図参照)、灰色埴土Ⅱ層は9-10期併行であることから、床直であることを加味すれば、9期新相併行が妥当と考えている。測定結果は、樹皮型ではあるが形成層から樹皮までの遺存状態が悪く、BC107に数年足した年代が推定されている。従って、9期新相はBC100年頃と考えられる。

スギ材ミカン割材(W14158)樹皮型は、96年度調査の埋積浅谷出土のもので、詳細な時期はわからない。出土した26地区E-5Gr中層で取上げられている土器は、6期から10期までの幅域をもっている。このことから、6-10期の範囲内に、BC139年の年代があると考えられる。

スギ材柱根(W28605)辺材型は、13地区G-9Gr内G9-22-P出土(第V章第15図参照)のもので、Pit内からは詳細な時期を示す土器の出土はみられない。しかしこの柱穴は、ちょうど環濠O2との重なりをみせており、環濠埋没以降に建てられた建物の柱材であるものと考えられる。周辺の環濠O2の廃絶後に作られた土坑の時期を加味すると、この柱穴は9-10期併行の可能性が高い。このことから9-10期はBC97+ $\alpha$ 年と考えられる。

スギ材板材(W33699)辺材型は、年輪年代と年輪セルロース酸素同位体比の両測定を行った資料である。測定結果は年輪年代測定法の結果と一致し、BC250+ $\alpha$ 年の年代が得られている。

### 4. 遺跡の動態と実年代について

第1図は、科学分析における年代測定成果と八日市地方遺跡の動態を合わせたものである。弥生時代前期相当である八日市地方1期から弥生時代後期前半相当である猫橋式までは、炭素年代測定により、BC550年からAD80年前後までの年代幅が与えられた。炭素年代法によって得られた絶対年代の序列は、八日市地方遺跡で把握した土器による時期変遷と整合的であることがすでに確かめられていた。今回、新たに提示した年代測定結果から、主要な時期について若干の検討を加えた。

八日市地方7期については、まず、年輪年代法により20地区SX02木棺小口がBC220+ $\alpha$ 年と測定され、さらに、6-7期と推定される4本の円形柱の年代がBC283+ $\alpha$ とされた。そして、スギ材板材(W33699)は、出土状況から7-9期併行と時期幅をもつ資料であったが、年輪年代および酸素同位体比の両方の測定でBC250+ $\alpha$ 年と同じ結果が得られた。この年代は、前二者の中間に位置し、出土資料の再利用等の可能性もあるものの、7期がBC250年頃と考える一助になっているものと判断したい。

八日市地方9-10期は、新たに実施した貝・獣骨における炭素年代測定法からは、9期は紀元前205年～紀元前110年、年輪年代測定法からは、9-10期はBC136年、年輪セルロース酸素同位体比からは、9期新相はBC107+数年、9-10期はBC97+ $\alpha$ 年であることが判明している。

以上のことから集落動態を考えると、八日市地方遺跡の環濠集落としての開始時期はおおよそBC350年前後であり、埴田文系土器の波及期にあたる。BC300年前後する時期には、小松式土器が成立し、集落規模は拡大を始める。凹線文土器が波及するのは9期で、BC150～100年頃と目される。集落Ⅱ期からⅢ期への集落画期とする9期は、近江を経由した畿内文化の波及が色濃くなる段階と考えている。集落規模は縮小に転じるものの、絵画資料や祭祀遺物が盛期を迎えており、社会の変化を敏感に感じとっていた可能性がある。そして、凹線文土器がほぼ確立する10期直後に集落は終焉を迎えるのである。年代としてはBC50年までは継続しなかったものと考えている。

梯川流域平野に少し視野を広げると、凹線土器が波及する9期、八日市地方遺跡の集落が縮小に転じる段階に呼応して、梯川中流域に向かって新しい集落が少しずつ拡散しはじめる。凹線土器波及期以降のこのような変化が、寒冷化等の大きな環境変化に起因するものか、あるいは政治的な動向によるものかは即断できないが、少なくとも八日市地方遺跡の拠点集落としての役割に大きな変動があったことは確かであろう。そして、八日市地方遺跡が環濠集落としての終焉を迎えるBC50年前後には、一針C遺跡や白江梯川遺跡、大長野A遺跡が成立している。従って、小松平野において集落が爆発的に増加し始める後期前半期は、紀元後80年前後と考えられる。

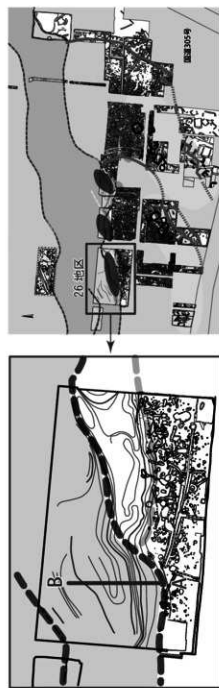
時代時期 区分	畿内 様式	八日市地方		西暦			八日市地方遺跡の変遷
		集落	土器	AMS	年輪	炭素	
縄文後期 ／ 弥生前期	I		0				砂層中に縄文後期包含層
			1	-550			★埋積浅谷より、遠賀川式土器出土。 埋積浅谷より遺物散見。
			2	-400			クヌギ・アベマキ等（ドングリ）の貯蔵穴。 <b>縄文系土器の波及</b>
弥生中期 前葉	II	I期	4	-350			★環濠掘削開始。環濠集落の成立。 埋積浅谷肩部に木器貯蔵開始。 管玉生産開始。
			5				★環濠再掘削。 居住域拡大。 <b>小松式土器の成立</b>
			6	-300			★環濠再掘削。
弥生中期 中葉	III	II期	7		-283± -250± -220±	-250±	八日市地方遺跡の最盛期
			8	-200			
			9				★居住域縮小。 <b>凹線土器の波及</b> 埋積浅谷肩部に貝層・貯蔵穴（ヒシ・トチ等）
弥生中期 後葉	IV	III期	10	-100 -40			★集落廃絶。
弥生後期	V						★埋積浅谷がほぼ埋まった後、一時的土器祭祀。

(下清 2016)

・年輪年代における年代数値に「」があるものは心材型を示す。

・炭素年代測定における弥生後期以外の年代は、小林謙一、福海貴子、坂本稔、工藤雄一郎、山本直人（2009）「北陸地方石川県における縄文晩期から弥生移行期の炭素 14 年代測定研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 150、1-20。によるものである。

第 1 図 八日市地方遺跡の変遷

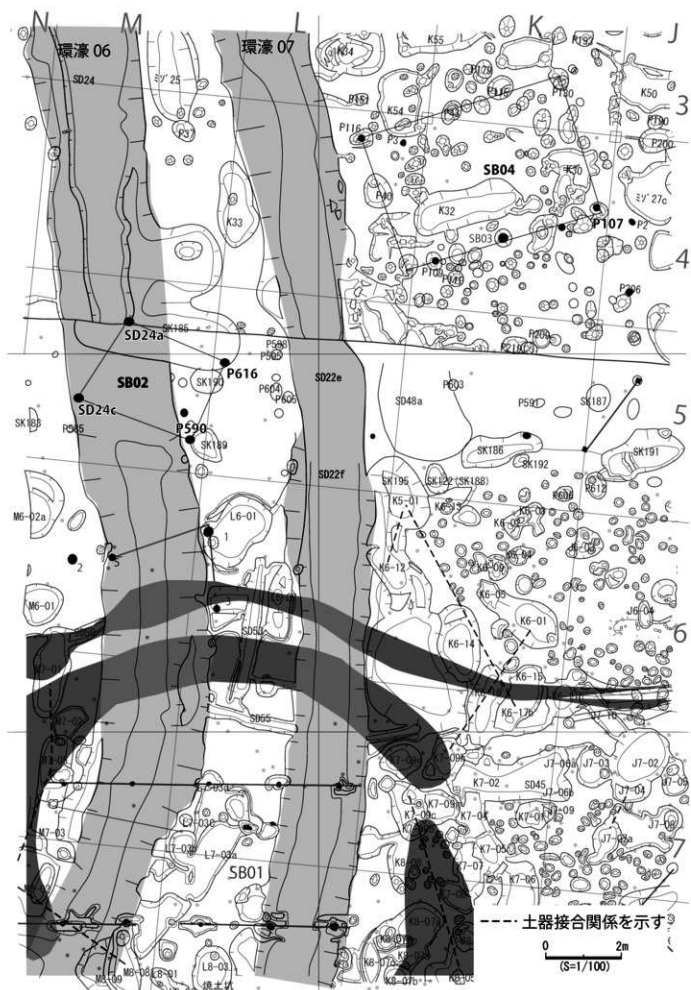


全体図（集落III期）と26地区の位置

26地区全体図と土層断面位置



第2図 26地区・集落III期(9・10期)の埋藏浅谷出土土遺物と層位



第3図 11地区 SB02, SB04 検出状況 (S=1/100)

## 第2節 広域編年について

本節は、八日市地方4～10期と各地域との併行関係を提示するものである。報告Iでは、I系からVI系まで細分可能な地域的系統をもとに様相を区分し、集落開始期から終焉まで断えず影響がある地域を近畿北部としながらも、当地域との併行関係を符合させることができなかった。そのため、同じ中部地方において、集落の動向、及びII・II'系のあり方が類似する尾張の編年<sup>22)</sup>との併行関係の提示にとどめていた。

平成26・27年度には、小松式土器の時代I・IIと冠した2つのシンポジウムを開催している。平成26年度は、樹木からのアプローチによる新たな年代測定成果を得て、八日市地方遺跡の実年代を追及、平成27年度は他地域との関係、特に東日本との併行関係を知る機会を得た。今回、それらの成果を踏まえて、八日市地方遺跡を軸に、実年代を加味しながら、石川県内及び広域な地域との併行関係を提示するものである。

### 1. 石川県内の既往の型式名との併行関係

第1表は、既往の型式名及び編年親との併行関係<sup>23)</sup>を示したものである。柴山出村式は2・3期、矢木ジワリ式は4・5期、小松式は6～8期、磯辺運動公園式は9期、専光寺式は10期、戸水B式はそれ以降である。

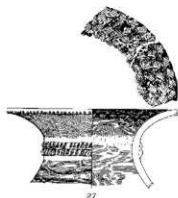
4・5期における様相は、I系を基準に北加賀、そして能登地域との併行関係をみている。

ただし、南加賀地域である八日市地方遺跡では、II(条痕文)系は、櫛状条痕で文様を描くのが主体であるのに対し、北加賀、能登地域では、指による沈線で文様を描くものが主体であるという差がみられる。

6期には、I系とII・II'系が融合する際に、櫛描文様には独特な文様及び文様構成が生まれる。その現象で生まれる小松式特有の斜行短線文は、金沢市中屋ヘシタ遺跡の事例を基準に考えると、北



能登地域からの搬入品 報告I-499 (S=1/6)



金沢市中屋ヘシタ遺跡 (S=1/6)

第1表 石川県内の既往の型式、編年親との併行関係

型式名	八日市地方	増山 1989	河合 1996	吉岡 1991	久田 1999	久田 1998	安 2009	楠 1996
下野						下野	1期	
長竹						長竹前半 長竹後半	2期	
	1期 2期					柴山出村 前半	3期	
柴山出村	3期	1期	II-1	II 1	II期前半	柴山出村 後半	4期	
矢木ジワリ	4期 5期	2期	II-2	II 2	II期後半			
小松	6期 7期 8期	3期 4期	III-1 III-2	III 1 III 2	III期 a III期 b		5期	
磯部	9期	5期	IV-1				6期	1-1
専光寺	10期		IV-2				7期	1-2
戸水			IV-3					1-3

加賀地域の方が出現が早い可能性がある。

7～8期に関しては、北加賀地域内において、7期と8期とを細分する良好な一括資料には恵まれていない。併行関係の把握が可能な資料としては、野本遺跡 S101、S102<sup>64</sup> が7期を主体として一部8期までかかる資料、そして、野本遺跡 S103、SK09、SK130<sup>65</sup> が8期併行と考えている。

また、8期新相と捉えている26地区埋積浅谷灰色埴土Ⅲ2層は、北加賀地域における金沢市磯部運動公園遺跡第3次 SK03<sup>66</sup> 併行と考えている。

9～10期に関しては、桶氏が西念・南新保遺跡Ⅳで提示した<sup>67</sup>ものも比較できる。西念1-1期の土器の様相は、「西からは凹線文系の、東からは栗林系、川原口式系土器の影響がみられ、土器が広域的に移動する時期」としており、八日市地方9期のあり方と整合的である。西念1-2期は、「凹線文系の広口壺と直口壺の出現、裏では在来系と凹線文系土器との折衷形態のものが過半数以上を占め、裏の肩部外面の櫛状具による刻みは1-2期から始まる指標」としている。八日市地方10期は、西念1-2期とのあり方に整合的であるが、若干、西念1-2期の方が新相の要素が強いものと感じられる。

## 2. 県外との併行関係

### a. 尾張

報告Ⅰ第1分冊 pp154-155 に詳しい。本節では、併行関係を示す資料を再度提示しながら、新資料も加えて永井氏による最新の報告<sup>68</sup>をもとに検討するものである。

Ⅱ系の搬入品である報告Ⅰ-269・270は尾張Ⅱ-3(朝日式新)と対応するものと考えている。

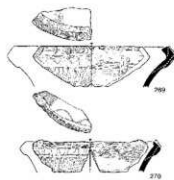
報告Ⅰ-470・482は朝日遺跡Ⅲ系に該当し、尾張Ⅲ-1(貝田町式1)に併行するものと考えられる。

新資料として、貝田町式細頸壺である641・32・304・1052があげられる。これらの搬入品、模倣品は、32が尾張Ⅲ-1(貝田町式1)、304が尾張Ⅲ-2(貝田町式2古)、641・1052は尾張Ⅲ-2～3(貝田町式2古)と考えられ、どちらも貝田町式2古に併行する。

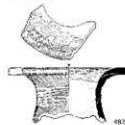
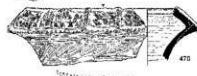
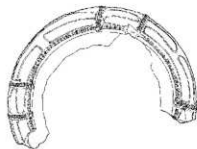
なお、尾張Ⅲ-4・5(貝田町式2新)併行における貝田町式細頸壺は当遺跡ではみられず、模倣品や在地との折衷土器の要素は、貝田町式2古段階をひきずっているものと考えられる。

次に尾張Ⅲ様式(貝田町式1・貝田町式2)の裏をみていくものとする。尾張Ⅲ-1では、ハケ調整、粗いハケ調整、二枚貝調整の3者がみられる。その中で比較できるものは、粗いハケ調整のものである。本報告ではⅢ系に含めたものであり、6期の裏139や5～6期482が該当する。次に、凹線文併行期である八日市地方9・10期は、尾張Ⅳ-1・2(貝田町式3)に併行する。

以上、八日市地方遺跡から出土した搬入品・模倣品と、尾張の編年との併行関係を検討した。これを八日市地方遺跡の様相区分と合わせると、八日市地方5期は尾張Ⅱ-3(朝日式新)、八日市地方6期は尾張Ⅲ-1(貝田町式1)、八日市地方7期は尾張Ⅲ-2



5期併行  
報告Ⅰ-269・270(S=1/6)



6期併行  
報告Ⅰ-470,482(S=1/6)



(貝田町式2古)、八日市地方9期は尾張Ⅳ-1(貝田町式3古)、八日市地方10期は尾張Ⅳ-2(貝田町式3新)と考えられる。八日市地方8期は、共伴関係は確認できないものの、前後関係から尾張Ⅲ-4・5(貝田町式2新)と考えられる。

#### b. 備前・備中

西日本系の併行関係は、河合氏が提示した備前・備中の編年<sup>98)</sup>をもとに検討する。

なお、河合氏は、備前・備中を中心に組みながら、中国・四国地方全体の併行関係を提示しているため、日本海側である出雲や因幡・伯耆との関連があるものも含めた検討を可能にしている。

備前・備中の中期Ⅰ-2期には、くの字型裏が主体をなしており、瀬戸内型裏は消滅し、裏には櫛描文施文がみられなくなる。しかし、讃岐や因幡・伯耆では、河合氏のいう中期Ⅰ-3併行まで裏の櫛描文施文は残存しているのである。当遺跡から出土したⅠ系の裏は、備前・備中中期Ⅰ-1に対応させるのではなく、中期Ⅰ(中期前葉)併行の範囲内として考えておきたい。

次に報告Ⅰ-398(本書P169内掲載)は、中期Ⅰ-3～Ⅱ-1併行と考えられる。また、323や997、1100は中期Ⅱ-1・2(出雲Ⅲ-1)併行と考えられる。備前・備中では、中期Ⅱ-2段階から壺胴部にみられる斜格子文・円形浮文の定着を基準としているため、323はおそらく中期Ⅱ-2まで下らないものと思われる。479は、口縁には凹線文2条、胴部最大径に二枚貝の貝殻腹縁を利用した刺突がみられる。備前・備中の編年では、凹凸のある口縁に刻みをもつものは中期Ⅱ-3、刻みがなくなる凹線を中期Ⅱ-4以降と目案している。よって、479は中期Ⅱ-4～Ⅲ-1併行と考えられる。967は、備前・備中の中期Ⅲ-1併行と河合氏からご教示をいただいている。

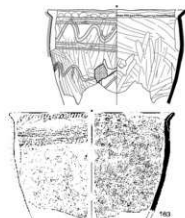
以上、八日市地方遺跡から出土した搬入品・模倣品と、備前・備中を中心とした中国地方の編年との併行関係を検討した。これを八日市地方遺跡の様相区分と合わせると、八日市地方4・5期は備前・備中の中期Ⅰ期範囲内、八日市地方7期は備前・備中の中期Ⅱ-1、八日市地方10期は備前・備中の中期Ⅱ-4～Ⅲ-1と考えられる。

#### c. 新潟

上越市吹上遺跡は、小松式土器と栗林式土器が共伴する遺跡であり、北陸と北信を結ぶ重要な遺跡である。本論では、笹澤氏の論考<sup>100)</sup>と本年度のシンポジウム事前検討会の成果を合わせて検討する。

吹上Ⅰ古段階は、「直線文(簾状文)と波状文の組み合わせが定量にみられる」という状況と、吹上遺跡出土のⅣ系の搬入や模倣品の状況から、八日市地方7期併行と考えられる。ただし、八日市地方遺跡の出土品ほど前段階要素が少ない分、吹上Ⅰ古段階併行は八日市地方7期開始期から併行するのではなく、やや下げたい。

吹上Ⅰ中段階では、「貝田町式土器細頸壺と無頸壺の器形に小松式土器の文様素を組み込んだもの」がみられる。この様相は、第1



4期併行  
報告Ⅲ-13, 報告Ⅰ-163(S=1/6)



5期併行  
報告Ⅰ-231(S=1/6)



吹上遺跡 2011  
SR614(S=1/6)

章4節内V系(東海系)の様相と類似している。

吹上Ⅰ新段階では、凹縁文系土器の出土はみられないが、八日市地方遺跡Ⅰ系の裏との比較から、八日市地方9期併行と考えられる。

なお、吹上Ⅱ期古段階は専光寺併行、吹上Ⅱ期新(中・新)段階は戸水B式と併行するものと考えられており<sup>(11)</sup>、本論では、この併行関係に齟齬はないものと考えている。

#### d. 北信

飯山市小泉遺跡では、上越市吹上遺跡同様に小松式土器の搬入がみられる。小松式土器片は、裏の口縁内面に斜行短線文を施すものである。これらの小松式土器は、吹上遺跡からの搬入品である可能性が高く<sup>(12)</sup>、八日市地方7新～8期に位置づけられる。共存する栗林式土器は栗林1式に該当し、小泉遺跡でみられる栗林式土器と小松式土器との共存関係は、吹上遺跡と共通している。

また、八日市地方遺跡のⅦ系(栗林系)搬入品は、栗林2式中・新段階併行であり<sup>(13)</sup>、八日市地方9～10期は栗林2式併行と考えられる。

以上、小泉遺跡や吹上遺跡からみられる小松式土器と栗林式土器との共存関係や、八日市地方遺跡のⅦ系から、八日市地方の様相と栗林式との併行時期を検討した。馬場氏の論考<sup>(14)</sup>は、栗林式土器の型式変化に合わせて、石川氏の論考<sup>(15)</sup>を参考にしながら、尾張、加賀(八日市地方併行)と北信(長野)、埼玉北西部との併行関係をみているものであり、上記、検討した成果とほぼ同様の位置づけがなされている。

#### e. 埼玉

北武蔵との併行関係は、小敷田遺跡や池上遺跡から出土した小松式土器から検討する。小敷田遺跡Ⅰ区Ⅰ号方形周溝墓から出土した小松式土器は、八日市地方7新～8期に位置づけられる。また、共存している栗林式と小松式土器の折衷土器から、小松式土器の北武蔵への流入には、栗林式土器が関与していることが、小松式土器流通ルートからも伺われる<sup>(16)</sup>。Ⅰ号方形周溝墓出土土器は、北武蔵の編年では、池上新段階と考えられている。前述した、石川氏、馬場氏の編年の位置付けでは、八日市地方7期新段階は池上(古)で、八日市地方8期は池上(新)に位置づけられている。

以上、八日市地方の様相からみた小敷田遺跡出土の小松式土器の評価は、石川氏、馬場氏との編年の位置づけとも矛盾はない。



小敷田遺跡  
1号方形周溝墓出土  
(S=1/6)

#### まとめ

以上、八日市地方遺跡の様相区分と県内、さらには各地域との編年の位置づけを検討した結果を第1・2表にまとめた。なお、八日市地方遺跡からは、現在のところ畿内の土器はみられない。また、小松式土器も畿内からはみられない。よって、直接的関係はみられないため、石川氏の編年の位置付けにおける尾張との併行関係を踏襲するものとした。また、古朝鮮・楽浪地域、北部九州は久住猛雄氏に、そして北部九州と備前・備中との併行関係は、久住猛雄氏と河合忍氏にご教示いただいた。

全体として、西日本系土器や伊勢湾岸の土器と小松式土器、小松式土器と北信の土器、それぞれの接点がかような広域な編年の位置づけを可能にしている。さらに備前・備中との併行関係は、北部九州との併行関係を可能にした。このことにより八日市地方10期開始期は、大陸におけるBC108の楽浪郡設置という実年代にたどり着くに至っている。八日市地方10期は、集落解体直前の段階であり、集落規模は縮小するものの、絵画土器や中国地方に特徴的な分銅形土製品、鳥形土製品など、祈りや集団のまつりに関わるものが著しく増加する段階である。また、集落規模の縮小とともに、梯

川中流域や加賀市八日市川周辺といった、八日市地方遺跡から20km圏内における集落が増加し、定着する時期にあたる。こうした集落の変動期にあたる10期が、楽浪郡設置時期との重なりをみせるのは興味深い。

2003年に八日市地方遺跡の土器変遷を提示してから10年以上経ち、いままでも多くの研究者からさまざまなことをご教示いただけてきた。日本海沿岸の東と西の中間、石川氏の言葉を借りると「弥生時代中期における西日本と東日本を連接する扇の要」である遺跡に携わる担当者として、少しはご教示いただいた方々に還元できたであろうか。

最後に、本論で提示した広域編年において、ご教示に基づいて記載するにあたり、誤認等があればすべて筆者の責任である。

[註・参考文献]

- 小林謙一・福海真子・坂本稔・工藤雄一郎・山本直人 2009 「北陸地方石川県における縄文晩期から弥生移行期の炭素14年代測定研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第150集
- 石黒立人 1990 「遺尾の弥生中期土器」『伊勢湾岸の弥生中期をめぐる諸問題』第7回東海埋蔵文化財研究会資料・永井宏幸 2002 「3 尾張地域」『東海地域の様式と編年』
- 増山 仁 1989 「小松式土器の再検討」『北陸の考古学』Ⅱ石川考古学研究会  
河合 忍 1996 「北陸弥生土器様式の変遷過程—器種・用途別の計量分析を中心として—」『石川考古学研究会々誌』39  
吉岡康暢 1991 「北陸弥生土器の編年と画期」『日本海域の土器陶磁—古代編一六興出版  
久田正弘 1998 「北陸地方西部の土器の動き」『水道跡発掘調査資料図譜』第三冊 水道跡発掘調査資料図譜発行会  
久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌』92  
安 英樹 2009 「集落と社会 日本海沿岸地域」『中部の弥生時代研究』  
楠 正勝 1996 「第5章 まとめ」『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市教育委員会
- 松任市教育委員会 1995 『松任市野本遺跡』
- 石川県松任市教育委員会 2002 『松任市野本遺跡』Ⅲ
- 金沢市教育委員会 1991 『金沢市文化財要 平成2年度 金沢市埋蔵文化財調査年報』
- 楠 正勝 1996 「第5章 まとめ」『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市教育委員会
- 永井宏幸 2015 「中部」『考古調査ハンドブック12 弥生土器』佐藤由紀男編集 朝日新聞出版
- 河合 忍 2015 「中国・四国」『考古調査ハンドブック12 弥生土器』佐藤由紀男編集 朝日新聞出版
- 笹澤正史 2013 「新潟県吹上遺跡における土器様式の推察に関する一考察」『弥生土器研究の可能性を探る—弥生土器研究フォーラム2013』
- 同上
- 笹澤正史氏のご教示による
- 馬場伸一郎氏のご教示による
- 馬場伸一郎 2015 「小松集団と交流する信州栗林集団」『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』小松市教育委員会
- 石川日出志 「栗林式土器の編年・系譜と青銅器文化の受容」『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100, pp.182-191
- 小松市教育委員会 2015 「公開検討会資料」『小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る』小松市教育委員会

飯山市教育委員会 1995 『小泉弥生時代遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告42

小松市教育委員会 2003 『八日市地方遺跡Ⅰ』

小松市教育委員会 2008 『八日市地方遺跡Ⅲ』

埼玉埋蔵文化財調査事業団 1991 『小敷田遺跡—一般国道17号熊谷バイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告書第95集』

上越市教育委員会 2006 『新潟市上越市吹上遺跡—主要地方上越新井線関係発掘調査報告書1—』

第2表 八日市地方遺跡と各地域との併行関係

時期 区分	古朝群・ 東流地域 (白井2001)	北越九州 中期は田崎・常松など、 前期は田崎など	備前・備中 (河合2015)	尾張時代 (無)	河内 (寺沢・森井 1989)	大和 (藤田・松本 1989)	尾張 2002	尾張時代 の遺跡	下河 (2015)	石川県	新潟 (笹澤 2012)	北信 (石川 2002)	北武蔵	
前期		板付Ⅰ式(古) 板付Ⅰ式(新) 板付Ⅱa式 板付Ⅱb式 板付Ⅱc式	前期Ⅰ											
			前期Ⅱ・Ⅲ											
			中期Ⅰ-1 中期Ⅰ-2 中期Ⅰ-3	城/橋式(古) ……… =金瓶式(木本) 城/橋式(新) =KⅡa式	Ⅱ-1 Ⅱ-2 Ⅱ-3	Ⅱ-1b Ⅱ-2 Ⅱ-3	Ⅱ-1 Ⅱ-2 Ⅱ-3	八日市3 八日市4 八日市5 八日市6	矢本7例 (松前)					
中期 中葉	古朝群	須玖Ⅰ式(古) =KⅡb式	中期Ⅱ-1	Ⅲ-1	Ⅲ-1	Ⅲ-1	Ⅲ-2 Ⅲ-3	BC220-	八日市7	小松	吹上Ⅰ-1		池上(古)	
		須玖Ⅰ式(新) =KⅡc式	中期Ⅱ-2	Ⅲ-2	Ⅲ-2	Ⅲ-2	Ⅲ-4 Ⅲ-5	BC136-	八日市8		吹上Ⅰ-2	粟林1	池上(新)	
		須玖Ⅱ式(古) =KⅢa式	中期Ⅱ-3 中期Ⅱ-4 中期Ⅲ-1	Ⅳ-1 Ⅳ-2	Ⅲ-3 Ⅲ-4	Ⅳ-1 Ⅳ-2	Ⅳ-2 Ⅳ-4	BC107- BC97-	八日市9	磯部運動 公園	吹上Ⅰ-3	粟林(古)		
中期 後葉	前1c第2 前1c第4 4段半期	須玖Ⅱ式(新) =立石式 =中流式/東流型 =須玖Ⅰ式(新) =須玖Ⅱ式(新)	中期Ⅲ-2 中期Ⅲ-3	Ⅳ-3 Ⅳ-4	Ⅳ	Ⅳ-3 Ⅳ-4		BC52	八日市10	善光寺	吹上Ⅱ(古)	粟林2(新)	北島	
		須玖Ⅲ式(古) =中流式/東流型 =須玖Ⅱ式(新)	中期Ⅲ-2 中期Ⅲ-3	Ⅳ-3 Ⅳ-4	Ⅳ	Ⅳ-3 Ⅳ-4				戸水B	吹上Ⅱ(新)	粟林3	(新中西 Ⅳ-1号方面)	
		須玖Ⅳ式(古) =須玖Ⅲ式(古)	中期Ⅲ-2 中期Ⅲ-3	Ⅳ-3 Ⅳ-4	Ⅳ	Ⅳ-3 Ⅳ-4								

・この表は平成26年度「フォラム・小松式土器の時代Ⅱ」小松発 北陸新幹線沿線の弥生文化を探る」公開検討会にて議論用の基礎資料として作成したものに一部加除したものである。  
 ・基本としては石川日出志(2012)を基とし、北陸地域以東は、八日市地方遺跡の変遷から、馬場伸一郎氏、笹澤正史氏、吉田 稔氏に土器の取見と合わせて併行時間のご教示いただき作成したものである。

## 結 語

小松駅東土地区画整理事業計画が具体化した時点では、遺跡地図上での八日市地方遺跡の推定範囲は、およそ8,000㎡程度であった。昭和5年の後藤長兵衛氏による磨製石斧発見がきっかけとなり、ご子息の後藤長平氏に本遺跡への強い探求心が芽生える。後藤長平氏や、同じ小松町在住の上野与一氏が調査を行ったのは、両氏が未だ10代後半の昭和12年から13年にかけてのことである。戦後、両氏の声かけで行われた明治大学や石川考古学研究会の調査範囲はごく僅かで、遺跡地図上の大きさは、微地形を念頭におきながらも、発見地周囲を感覚的に丸く囲ったというのが実情だった。

それでも、そのわずかな調査から「小松式土器」は設定されたのである。しかしその後は、資料の蓄積が全くなされず、能登、あるいは富山や新潟など、周辺地域の土器様相の方がむしろ明らかになっていった。橋本澄夫氏や増山仁氏らの再検討が加えられながらも、標識遺跡の実体はペールに包まれ、最初の調査であるゆえの学史的な型式名として生き続けたといっても過言ではない。

明治大学杉原荘介氏による調査からちょうど50年の時を経た平成12年(2000)、小松駅東土地区画整理事業に伴う8カ年にわたる発掘調査が完了した。ふたたび目覚めることとなった遺跡の推定面積は15haを超え、膨大な出土品と充実した内容から、日本海側屈指の拠点集落と位置づけられるに至った。まさに「小松式土器」標識遺跡の面目躍如たるものがあり、我が国の弥生時代研究において、名実ともに揺るぎない光彩を放つ遺跡となった。そうした現在の姿に思いをいたすとき、先人の明と運命のともいえる学史的な感慨を抱かざるを得ない。

昭和60年から61年にかけて、小松市は東部の丘陵地で産業振興団地の造成事業を行い、開発と保存の問題で市政が激しく揺れた経緯をもっていた。遺跡確認調査を十分に行わないまま事業に着手したため、周知の古墳5基からなる河田山古墳群は、樹木伐採後に総数62基の大古墳群に変貌したのである。そうした事態への反省から、開発事業に先立つ遺跡確認調査の必要性がようやく認知されはじめた。昭和63年には、市街地にある運動場の地下から試掘調査によって前方後円墳が発見され、大量の人物埴輪が出土するに至っている。矢田野エジリ古墳と名付けられたこの古墳の埴輪は、その後一括で国の重要文化財に指定されることになる。この北陸初となる発見は大きく報道され、確認調査の大切さと成果を語るに十分な説得力を持った。

小松駅東土地区画整理事業は、そうした流れを経た中での大規模公共事業であり、順当に確認調査が行われたのである。開発側から試掘調査依頼が提出された平成4年、奇しくも新版の『石川県遺跡地図』が発行されている。遺跡地図上での遺跡の推定面積は小さく、「宅地化により遺跡の大部分損壊」とまで記されていたので、調査着手当時はどちらかといえば楽観的であったことは否めない。しかしながら、予想とは大きく異なり、遺跡は事業区域内で「とどめもない」広がりを見せた。

八日市地方遺跡が最初に全国的な注目を集めたのは、平成7年度に出土したシカの群れと狩人を描いた絵画土器の出土であったと記憶している。この年から始まった河川跡の調査では、膨大な量の木製品が出土しはじめていた。そして、現地での出土品整理作業も始まったことで、貴重な発見がリアルタイムで次々と報じられるようになっていた。溢れる出土品と過酷な調査スケジュール、保管が難しい木製品と微細な製玉遺物群、おびただしい遺構の重なりと湧水による遺構の崩壊、市レベルでは到底及ぶべくもない調査規模に対して、苦悩の調査が進められた。華やかな報道とは裏腹に、私たち調査担当者は疲弊し、研究や見識は発見されるものに追いついていなかったのである。

そうした中、報道を賑わせれば、それに呼応して全国から著名な研究者の方や先学の方々が関心を持って訪れ、様々な評価とご指導をさせていただくことができた。そして、そのときのネットワーク、研究者同士のつながりが、現在に至るまで、大きな財産となっているのは確かである。八日市地方遺跡の解明に取り組むための大きなエンジンとなっていった。

私たち担当者は、市レベルの決して恵まれない体制の中だからこそ、多くの研究者の方に研究対象として活用していただくことを望み、資料をオープンにしてきた。それは一つの戦略でもあった。評価していただいた資料を再び報道資料として還元し、それが市民へのアピールとなり、調査に対する理解と応援をもらう原動力としてきたのである。

報告書の刊行は、こうして八日市地方遺跡に集った多くの研究者による応援の賜であった。報告1刊行の年度にあわせてフォーラム『北陸における弥生都市』を開催。刊行の翌年度には、出土品一括で市の文化財に指定している。安定した調査・研究体制を望み、埋蔵文化財センター建設への夢を持ち続けた私たちにとって、八日市地方遺跡出土品は期待のホープであった。その重要な資料群をいかに解明し、広報し、活かすかを考え、膨大な量の資料群が高評価を受けることによって、常に注目と関心を維持することこそが重要であった。

こうした観点から、以下にまとめたように、市政の大きな行事や文化財指定、報告書の刊行などを節目として、市民へのPRと学術的な進展をかねた普及啓発事業を重ねてきた。

#### 八日市地方遺跡調査終了後の普及啓発活動（所属等は当時、敬称等は略させていただきます）

◆平成12年 5月30日 小松駅東土地区画整理事業に伴う発掘調査完了

◆平成12年12月 小松市制施行 60周年

平成12年12月15日～平成13年1月21日 小松市制 60周年記念事業 埋蔵文化財特別展「こまつ二万年の歩み」

◆平成14年10月 第14回全国生涯学習フェスティバル「まなびピア石川2002」小松会場関連事業

平成14年10月 5日～11月24日 埋蔵文化財企画展「樹を活かした木器加工～八日市地方遺跡出土木製品より～」

平成14年10月13日 フォーラム『北陸における弥生都市～小松市八日市地方遺跡を検証する～』

基調報告「奈良県における弥生拠点集落」田原本町教育委員会 藤田三郎

「伊勢湾地方における都市成立の可能性」愛知県埋蔵文化財センター 石黒立人

「北陸の弥生集落概観」石川県埋蔵文化財センター 安 英樹

「小松市八日市地方遺跡の報告」小松市教育委員会 福海貴子

討 論「八日市地方遺跡は弥生都市と呼べるのか」司会 金沢学院大学 橋本澄夫

総 括「北陸における弥生都市～八日市地方遺跡とは～」金沢学院大学 橋本澄夫

◆平成15年 3月31日 『八日市地方遺跡！』刊行

◆平成15年11月 3日 小松市文化財指定「八日市地方遺跡出土弥生時代遺物」一括

◆平成18年10月20日 石川県文化財指定「八日市地方遺跡出土品」984点

平成18年12月 9日～平成19年3月18日 県文化財指定記念特別展『八日市地方遺跡～地中から今、弥生時代が甦る～』

平成18年12月17日 第1回県文化財指定記念特別講演会

「弥生環濠集落とはなにか」明治大学 石川日出志

平成19年 1月21日 第2回県文化財指定記念特別講演会

「弥生時代の祭りの伝統」大阪府立弥生文化博物館 金岡 恕

平成19年 2月18日 八日市地方遺跡県文化財指定記念フォーラム『弥生時代の西と東』

報告1「福井県における弥生時代の集落様相」福井県教育庁埋蔵文化財センター 赤澤徳明

報告2「新潟県における弥生時代の拠点集落の変遷～上越地域を中心として～」上越市教育委員会 笹澤正史

報告3「石川における弥生時代の拠点集落について」小松市教育委員会 下濱貴子

座談会 司会進行 小松市教育委員会 望月精司

- ◆平成22年 4月24日 小松市埋蔵文化財センター完成
- ◆平成23年 6月27日 重要文化財指定「石川県八日市地方遺跡出土品」1,020点  
平成23年 7月 7日～10月10日 重要文化財指定記念特別展「八日市地方遺跡」  
平成23年10月29日～1月 9日 重要文化財指定記念特別展「八日市地方遺跡から越の国へ」  
平成23年 7月10日 重要文化財指定記念第1回特別講演会  
「北陸弥生時代の精華」 奈良文化財研究所 深澤芳樹  
平成23年 9月11日 重要文化財指定記念第2回特別講演会  
「つながっていた弥生時代の山陰と北陸」 関西外国語大学 佐古和枝  
平成23年11月 6日 重要文化財指定記念第3回特別講演会  
「弥生社会の成立から見た八日市地方遺跡」 九州大学大学院 宮本一夫  
平成25年 3月2・3日 市民考古学講座「弥生時代の紋様・絵画・造形の意味を読み解く」 福原考古学研究所 橋本裕行
- ◆平成25年 3月31日 『八日市地方遺跡Ⅱ 第1部 遺構編 第2部 石器編』刊行  
平成25年 7月 6日～9月23日 埋蔵文化財センター夏季特別展「こまつ原始のものづくり」  
平成25年 7月14日 特別講演会「糸から布、そして衣へ～こまつ原始の織機り再現～」 福井大学 東村純子  
平成25年 9月 8日 特別講演会「コシとヒズモの匠技 一木工と玉つくり～」 松江市立立雲玉作資料館 三宅博士
- ◆平成26年 3月26日 『八日市地方遺跡Ⅱ 第3部 製玉編 第4部 木器編』刊行  
平成26年10月11日～11月30日 小松市立博物館特別展「大八日市地方遺跡展 ～小松式土器の時代～」  
平成26年10月18日 フォーラム「日本海を行き交う弥生の宝石」 in 小松  
特別講演 「九州弥生人の勾玉・管玉と北陸」 熊本大学 木下尚子  
基調報告 「弥生時代における玉つくりの展開」 岡山県古代古墳文化財センター 米田克彦  
「青谷上寺地遺跡の玉つくり」 鳥取県埋蔵文化財センター 河合章行  
「八日市地方遺跡の玉つくり」 小松市埋蔵文化財センター 宮田 明  
討 論 コーディネーター：木下尚子 パネリスト：基調報告者  
平成26年11月22・23日  
シンポジウム科学分析でここまでわかった八日市地方遺跡「小松式土器の時代一樹木からのアプローチ」  
基調講演 「八日市地方遺跡が語るもの」同志社大学歴史資料館 若林邦彦  
基調報告 「交流拠点としての八日市地方遺跡」愛知県埋蔵文化財センター 樋上 昇  
「木を使い分けた人々 一樹種同定分析から一」総合地球環境学研究所 村上由美子  
「炭素は語る 一年代測定から環境・食の復元まで一」金沢大学環日本海域環境研究センター 宮田佳樹  
「年輪が語る年代と環境 一酸素同位体比の分析から一」総合地球環境学研究所 中塚 武  
討 論 コーディネーター：若林邦彦 パネリスト：基調報告者・小松市埋蔵文化財センター下濱貴子  
ゲストコメンテーター 奈良文化財研究所客員研究員 深澤芳樹・光谷拓実  
平成27年 3月19日～6月21日 全国植樹祭記念展「木木（もくもく）考古学一本で学ぼう！こまつの原始一」
- ◆平成27年 5月17日 小松市木場湖公園において「第66回全国植樹祭いしかわ2015」開催  
平成27年 6月 7日 特別講演会「こまつ原始の森と人 一弥生時代の森林資源利用技術を解く一」首都大学東京 山田昌久  
平成27年10月10日～12月 6日 埋蔵文化財センター秋季特別展「北陸新幹線ルートの弥生文化を探る」  
平成27年11月28・29日 フォーラム小松式土器の時代Ⅱ「小松発・北陸新幹線ルートの弥生文化を探る」  
特別講演 「弥生時代の『小松文化』」明治大学 石川日出志  
基調報告 「海の手、山の手、玉の手 一玉がつなぐ地域間の交流一」株式会社吉田建設 世澤正史  
「青銅器の足跡 一信州に至る北陸ルート」愛媛大学ミュージアム 吉田 広  
「小松集団と交流する信州栗林集団」下呂市教育委員会 馬場伸一郎  
討 論 コーディネーター：石川日出志 パネリスト：基調報告者・小松市埋蔵文化財センター下濱貴子  
ゲストコメンテーター 愛知県埋蔵文化財センター 樋上 昇
- ◆平成28年 3月31日 『八日市地方遺跡Ⅱ 第5部 土器・土製品編 第6部 科学分析編 第7部 補遺編』刊行

平成 18 年の石川県文化財指定後、文化庁調査官の積極的な評価と指導を受けながら、重要文化財指定への準備が着実に進められ、保管・展示の拠点となる埋蔵文化財センターの建設計画も同時進行することになる。そして、平成 22 年 4 月、小松市埋蔵文化財センターがいよいよ開館、翌年の平成 23 年 6 月に、念願の八日市地方遺跡出土品 1,020 点が一括で重要文化財に指定された。

指定後たちちに重要文化財指定記念特別展「八日市地方遺跡」と特別展「八日市地方遺跡から越の国へ」を連続開催、併せて 3 回の特別講演会も開催した。財政厳しい状況下であったが、その翌年から、報告書Ⅱの刊行とリンクさせるかたちで普及啓発への取り組みを展開してきた状況が、この主要事業の一覧から読みとっていただけると思う。

こうした主な講演会やシンポジウム以外にも、多くの資料検討会、研究会が開催され、また、外部からの発表依頼でお招きいただくことも多くなった。そして、研究者ネットワークの拡がりとともに、八日市地方遺跡の分析は様々な研究分野へと深化していった。多くの研究者の方々から、新しい分析視点の提案、あるいは広域連携の調査対象として八日市地方遺跡を選択していただき、私たちもそれに行ける限り応えることを心かけてきた。特に、自然科学分析分野からのアプローチは、報告Ⅰの段階から今回の報告に至るまで、研究対象としての魅力を高く評価していただき、自主研究や組織的な研究、あるいは科学研究費のなかで進めていただいていたものも多い。

須臾器窯の総数 300 基ともいわれる南加賀窯跡群を擁し、膨大な量の灰原資料を保管する小松市だが、このわずか一開発事業に伴う八日市地方遺跡の出土品は、本市収蔵スペースの 5 割近くを占めることになった。それでも、発掘調査の段階で自然遺物等は取捨選択せざるを得なかったり、土壌の持ち帰りがかなわず、貴重な情報を逸してしまったことへの悔恨の念も禁じ得ない。そうした中、必死の想いで持ち帰った資料群であるが、そのすべてを網羅した報告ができたわけではない。序章で述べたように、最終報告を終えてもなお、未分類、未精査の資料は山積しているのである。

平成 26 年度に開催した樹木シンポジウムの目的の一つは、ブルに保管されたままの資料群が、最新の分析手法を駆使することで大きな成果をもたらすことをアピールするためであった。樹種同定による植生復元や、年輪セルロース酸素同位体比による新しい年代測定結果などは、調査完了から十数年を経てもなお、報道を賑わせるに十分なインパクトをもつ成果となった。それは、土器や石器も同様である。碧玉の蛍光 X 線による産地推定が、地元紙で大きく取り上げられたのは、同年に開催したフォーラム「日本海を行き交う弥生の宝石 in 小松」直後のことである。また、本書で初めて報告した人面付土器は、本年度 11 月に開催したフォーラム「北陸新幹線ルートの弥生文化を探る」の前日、公開遺物検討会の席上で石川日出志氏と深澤芳樹氏によって初めて確認されたものである。

石器の産地分析や個体識別分類、土器の種子圧痕分析、煤等付着物の科学分析、樹皮や蔓性植物の分析、やり残したことは山ほどあり、本報告を終えようとしている今でも、研究と分析を継続する意欲は潰れていない。遺物の収蔵・保管に対して、「将来の再整理のため」という大義名分じみた響きも、自然科学分析の進展等によって、収蔵庫に眠る遺物が再び息を吹き返すことが現実となってきた。未来に向けて大切に保管し、研究と分析を継続する必要性を痛感している。

最後に、発掘調査の段階から出土品整理、そして市民への普及啓発事業に至るまで、応援・参加いただいた多くの研究者、研究機関、関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。そして、講演会やシンポジウム、展示会のたびに足を運んでいただいている市民の皆様に対しても心よりお礼を申し上げたいと思います。今後、八日市地方遺跡を小松のまちづくりの原点として、本市の誇りとするべく研究と発信につとめていくことをお約束し、結びといたします。



## 報 告 書 抄 録

ふりがな	ようかいちじかたいせき 2
書 名	八日市地方遺跡Ⅱ
副 書 名	小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻 次	
シリーズ名	第 5 部土器・土製品編 第 6 部自然科学分析編 第 7 部補遺編
編・著者名	櫻田 誠・下濱貴子・横幕 真・能城修一・佐々木由香・村上由美子・小林和貴・鈴木三男・光谷拓実・中塚 武・佐野雅規・村上由美子・許 晨曦・宮田佳樹・南雅代・中村俊夫
編 集 機 関	石川県小松市教育委員会
所 在 地	〒 923 - 8650 石川県小松市小馬出町 91 番地 TEL (0761) 22-4111
発行年月日	西暦 2016 年 3 月 20 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
八日市地方 遺跡	石川県小松市 日の出町 一丁目・二丁目	17203	03152	36° 23' 49" -24' 04"	136° 27' 22" -41'	1993.06.25 ~ 2000.05.30	32.556	土地区画整理事業

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺物	特記事項
八日市地方	集落跡	弥 生	<ul style="list-style-type: none"> <li>・土器、土製品</li> <li>弥生土器、輪函土器、土製加工円盤、土鍾・土玉類、</li> <li>分銅形土製品、ミニチュア土器等</li> <li>・木器類</li> <li>刺突具、切断材、ミカン割材等</li> </ul>	遺物は本報告のみ
要 約	弥生時代中期の大規模環濠集落である。本報告は、第Ⅱ分冊にあたり、第Ⅰ分冊の補遺編・土器・土製品編、自然科学分析編、補遺編に該当する。			

---

---

## 八日市地方遺跡Ⅱ

—小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

第5部土器・土製品編 第6部自然科学分析編 第7部補遺編

発行日 平成28年3月20日

編集・発行 石川県小松市教育委員会

石川県小松市小馬出町91

TEL (0761) 22-4111

---

---